

長崎県文化財調査報告書 第188集

## 地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ

2006

長崎県教育委員会

## 地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ

- ・浜郷遺跡 (新上五島町)
- ・魚洗川B遺跡 (雲仙市国見町)

2006

長崎県教育委員会

## 発刊にあたって

本書は、平成14年度から実施しております重要遺跡情報保存活用事業に伴う地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書の第3冊目です。

現在長崎県内には、約3,800ヵ所の遺跡があり、長崎県教育委員会では、そのうち155ヵ所を学術上特に重要な遺跡として位置づけております。

本事業は、この重要遺跡について、平面的な広がり・遺構の分布状況などを発掘調査によって把握し、積極的に遺跡の保護を行うことを目的として実施しています。また、この調査で得られた資料は、開発事業との円滑な調整や協議資料としても活用が図られております。

平成16年度の調査は、南松浦郡新上五島町有川郷に所在する浜郷遺跡、雲仙市国見町に所在する魚洗川B遺跡において実施しました。浜郷遺跡は弥生時代の埋葬遺跡で、これまでの調査で多様な墳墓が検出されています。今回の調査でも壺棺や人骨が発見されました。魚洗川B遺跡は、百花台遺跡群に含まれ、旧石器時代・縄文時代晩期の文化層がみられる遺跡です。今回は主に縄文時代晩期の土器が出土しており、新たな資料が追加されました。

最後になりましたが、今回の調査に際し、ご理解とご協力をいただきました地元の関係者の皆様に深く感謝いたしますとともに、本書が文化財の保護と活用に広く利用され、地域の歴史を一層深く理解するための資料となれば幸いに存じます。

平成18年3月31日

長崎県教育委員会教育長  
立石 晓

## 例 言

- 1 本書は長崎県教育委員会が平成14年度から実施している重要遺跡情報保存活用事業に伴う地域拠点遺跡内容確認発掘調査の報告書である。
- 2 本書には、平成16年度に調査をおこなった浜郷遺跡（新上五島町有川郷）、魚洗川B遺跡（靈仙町引見町）の調査結果を収録した。
- 3 本書は遺跡ごとに分担執筆した。それぞれの執筆者は以下のとおりである。

浜郷遺跡 本田秀樹・平田賢明  
魚洗川B遺跡 山下英明

- 4 詳細については遺跡別の例言を参照されたい。
- 5 本書の総括編集は山下がおこなった。

## 総 目 次

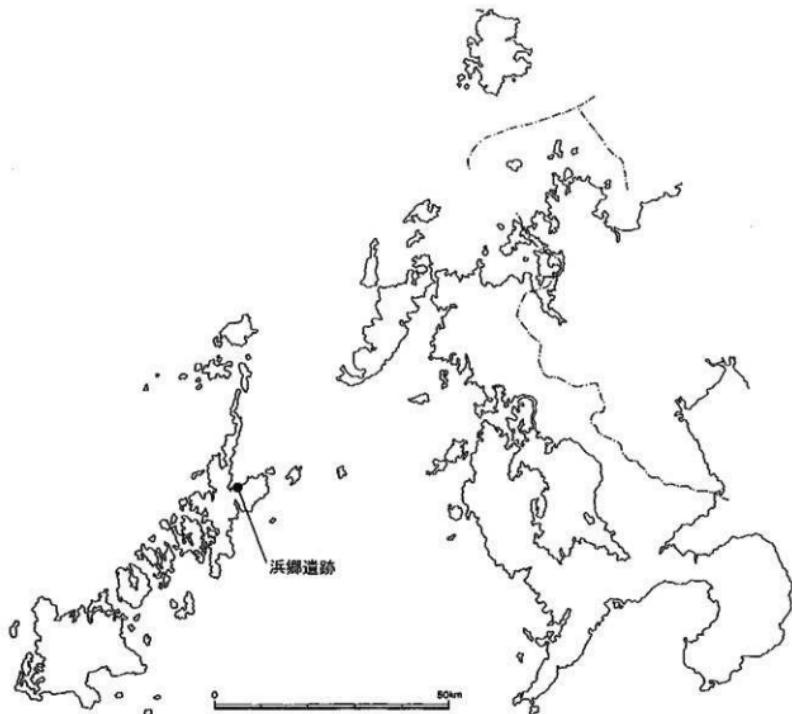
### 第Ⅰ部 浜郷遺跡（新上五島町有川郷所在）

第1章 経過 .....	1
第2章 遺跡の立地と環境 .....	2
第3章 調査 .....	6
第4章 総括 .....	15

### 第Ⅱ部 魚洗川B遺跡（雲仙市国見町所在）

第1章 経過 .....	31
第2章 遺跡の立地と環境 .....	32
第3章 調査 .....	38
第4章 総括 .....	47

## 第 I 部 浜郷遺跡（新上五島町）



遺跡位置図

## 例　　言

- 1 本書は南松浦郡新上五島町有川郷210-1番地他に所在する浜郷遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の名称は『長崎県遺跡地図』が“浜遺跡”，『原始・古代の長崎県』（資料編1）では“浜郷遺跡”と記され、統一されていない。ここでは学史に従って“浜郷遺跡”的呼称を用いる。
- 2 調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり、旧・有川町教育委員会の協力を得て、平成16年6月21日から同年7月2日にかけて実施した。
- 3 調査関係者は次のとおりである。

調査担当 長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	本田 秀樹
	文化財調査員	平田 賢明
調査協力 旧・有川町教育委員会	教育長	山下祐二郎
	教育次長兼生涯学習課長	原 光康
	生涯学習課主事兼学芸員	内藤かおり
- 4 造構実測は調査担当者が行い、遺物実測は平田が、トレースは和田美加が行った。
- 5 本書関係の写真撮影は、調査時の造構については本田が行い、遺物写真は平田の協力を得て、本田が撮影した。
- 6 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 7 本書における遺物・写真・図面等は、長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
- 8 本書は本田と平田が分担して執筆し、編集は本田が行った。

## 本　文　目　次

<b>第1章 経過 (本田)</b>	
第1節 調査の経過 .....	1
第2節 調査組織 .....	1
<b>第2章 遺跡の立地と環境 (平田)</b>	
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3節 調査の履歴 .....	4
<b>第3章 調査</b>	
第1節 調査の方法 (本田) .....	6
第2節 墓位 (本田) .....	7
第3節 調査区の概要 (本田) .....	8
第4節 出上遺物 (平田) .....	14
<b>第4章 総括 (本田)</b> .....	15

## 挿 図 目 次

遺跡位置図.....	とびら
第1図 浜郷遺跡位置図 (s=1/100,000) .....	1
第2図 有川郷周辺の遺跡 (s=1/25,000) .....	3
第3図 1号石棺実測図 (s=1/30) .....	4
第4図 壁・甕棺実測図 (s=1/10) .....	5
第5図 試掘坑配置図① (s=1/2,500) .....	6
第6図 試掘坑配置図② (s=1/1,000) .....	7
第7図 試掘坑配置図③ (s=1/200) .....	8
第8図 T 1(上)・T 2(下)土層堆積状況 (s=1/30) .....	9
第9図 T 3人骨検出状況① (s=1/30) .....	10
第10図 T 3人骨検出状況② (s=1/20) .....	11
第11図 T 4造構検出状況 (s=1/30) .....	12
第12図 試掘坑配置図④ (s=1/200) .....	13
第13図 T 5造構検出状況 (s=1/100) .....	14
第14図 出土遺物実測図 (s=1/3, 8・9はs=2/3) .....	14
第15図 浜郷遺跡範囲 (s=1/2,000) .....	15

## 図 版 目 次

図版 1 .....	20
1 調査風景    2 T 1西壁    3 T 3西壁	
図版 2 .....	21
1 T 3アワビ検出状況    2 T 3造構検出状況    3 T 3イノシシの下顎骨	
図版 3 .....	22
1 T 3大腿骨    2 T 3頭蓋骨    3 T 4造構検出状況	
図版 4 .....	23
1 T 5～7調査区全景    2 T 5造構検出状況    3 T 5ピット検出状況	
図版 5 .....	24
1 昭和14年当時の浜郷遺跡    2 昭和44年調査時の検出遺構（長崎大学医学部撮影）	
図版 6 .....	25
出土遺物①	
図版 7 .....	26
出土遺物②	

## 第1章 経過

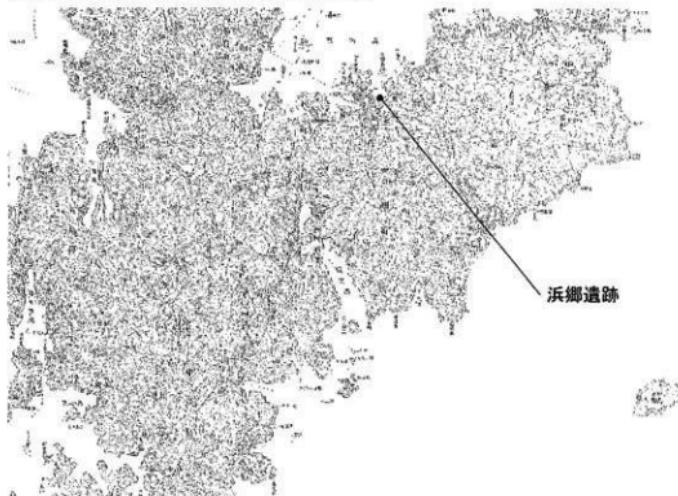
### 第1節 調査の経過

有川町は五島列島の北部、中通島の北東に突出した半島部に位置する。遺跡の所在する有川郷は、南を大高山・桜ヶ岳・旭岳に囲まれ、北は有川湾に面する場所にある。ここは木場川と大川が合流する地点にあたり、上五島では数少ない平地が形成されているため、古くから政治・経済の中心地として発達してきた。北東方向の海浜部には、旭岳から派生した低丘陵に沿って弓なりに砂の堆積がみられ、浜郷遺跡はその砂丘上の標高5~7m付近に立地する。

現在、砂丘の頂部を北西~南東方向に町道が縱貫し、両側には民家が立ち並ぶ。水道管や貯水槽の埋設工事に伴って多数の人骨が発見されたことで知られ、昭和42(1967)年と44(1969)年には九州大学・長崎大学・別府大学の合同学術調査も行われている。調査では腰棺や壺棺、石棺等の遺構から61体の人骨が出土し、貝輪や貝製垂飾品、玉類といった副葬品も伴っていた。こうした遺跡の特殊性を鑑みて、本県では重要遺跡に選定したが、遺跡範囲は住宅密集地と重なり、住宅の建替え等に伴う開発が地下に及ぶことも予想されたため、遺構の平面的な広がりと遺物包含層の厚さを把握するために確認調査を実施することとなった。昭和32(1957)年に人骨が発見された地下貯水槽の東隣で家の解体があり、追加調査が可能になったことも、調査に至る経緯のひとつに挙げられよう。また、浜郷遺跡の背後にある上原遺跡も墓地の建立や改葬等の開発が及びつあり、今回併せて調査を行った。

### 第2節 調査組織

調査は旧・有川町教育委員会の協力を得て、長崎県教育庁学芸文化課が主体となって実施した。なお、この調査の関係者は例言に記したとおりである。



第1図 浜郷遺跡位置図 (s=1/100,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

平成16（2004）年8月1日に中通島を構成する上五島町・新魚日町・有川町・奈良尾町及び岩松町の5町が合併し、新上五島町が誕生した。新上五島町有川郷（旧・有川町有川郷）は中通島の北東方向に突出した半島部にある。地勢は東部を中心に標高200m～400m前後の丘陵山地からなり、平野はそれによって形成された海岸平野と、河川によってつくられたデルタがわずかに見られるのみである。

遺跡が位置する有川郷は南を大高山（223.4m）、桜ヶ岳（324m）、旭岳（185m）などの山地に囲まれ、北は有川湾に面する。大川・木場川によって平野が形成されており、古くから近海捕鯨などの産業や・政治・経済の中心として発達してきた。町の北東方向には、有川湾沿岸に沿って堤防状に砂丘が形成されている。浜郷遺跡はその砂丘上、約5～7m付近に位置する。現在はその最頂部を町道が北西～南東方向に縦貫しており、その両脇には民家が立ち並ぶ。上原遺跡は浜郷遺跡の後背部にある標高13～14mの台地上に位置する。台地より南側に大川によって形成された低湿地をもつことなどから、桜ヶ岳円福寺跡や天堤山常楽寺跡など中世以降の土地利用がみられ、現在では畠地や寺院、墓地や町立有川中学校などに利用されている。

### 第2節 歴史的環境（第2図）

旧・有川町内（以下町内）には周知の遺跡が24箇所存在する。有川の歴史は古く、すでに旧石器時代にはその起源が求められるようである。また縄文・弥生時代に主体をおく遺跡が、全体の6割ないし7割を占める。よってここでは旧石器時代にふれ、縄文・弥生時代を中心に歴史的環境を述べる。

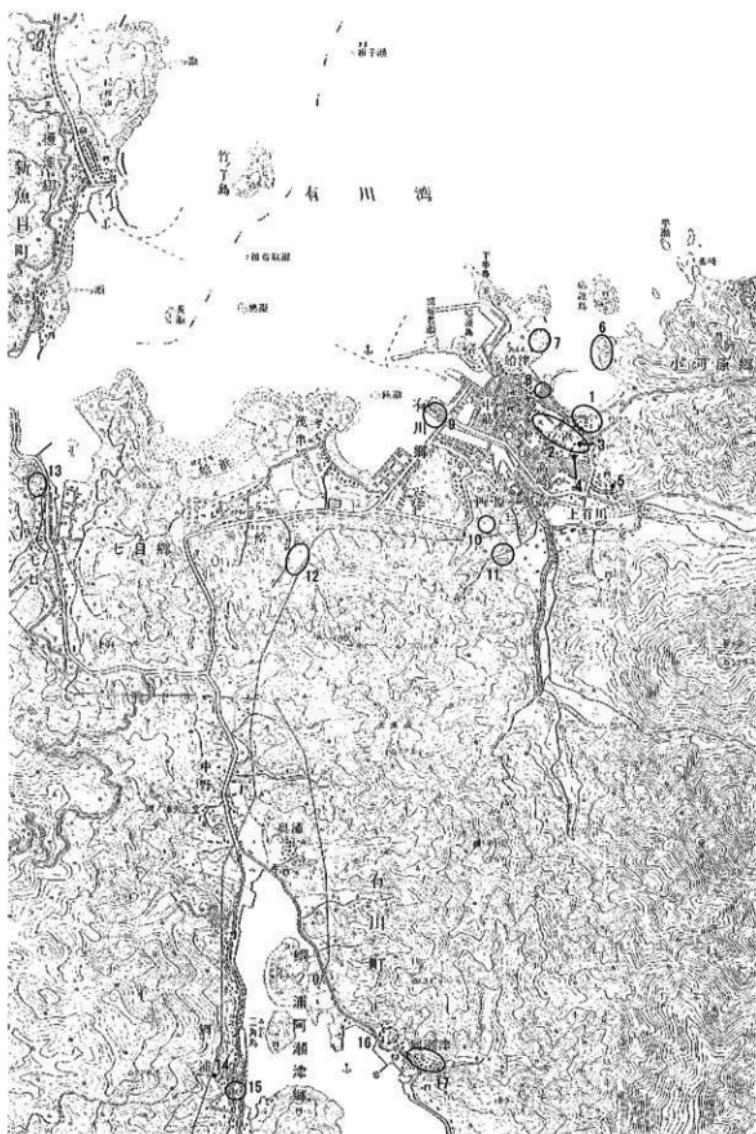
旧石器時代の遺跡としては、赤瀬C遺跡（赤尾郷小河原字小櫃越）がある。過去に細石刃やナイフ形石器が表面採集されている。また上原遺跡（2）においても、過去にナイフ形石器片が表採されたという。

縄文時代の遺跡としては、頭ヶ島白浜遺跡（友住郷字白浜）がある。昭和42年の人骨20体の発見を受け、発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代前期～晩期に至るまで営まれた埋葬遺跡であることが判明した。遺跡の立地は浜郷遺跡（1）同様に海岸砂丘上である。また散布地ではあるが、有川郷周辺には浜海中遺跡（6）、鯨見山遺跡（7）や西原A・同B遺跡（10・11）などがある。

弥生時代の遺跡としては、今回調査を実施した浜郷遺跡、上原遺跡に隣接する浜第2遺跡（8）があり、過去に人骨と墳墓、城ノ越式土器が出上したとされ、浜郷遺跡との関連が示唆されている。

古代に関しては、性格が明確な遺跡は、今のところ発見されていない。また中世においては、上原台地上に桜ヶ岳円福寺跡（3）や天堤山常楽寺跡（4）などがみられる。

町内の縄文・弥生時代の遺跡16箇所中、5割にあたる8箇所が有川郷周辺に集中している。このことは有川郷が、比較的広域な海岸状平野や、水源に恵まれたことに要因を求められよう。また海上交通や陸上交通の利便性から中・近世においても継続的に生活が行われていたようで、先に述べた寺院跡や、堂前様石塔群（5）などがみられる。また南側に海洋を抱く鯛之浦沿岸地域にも平野が広がっている。湾内最奥部の平野では現在遺跡は発見されておらず、鯛之浦貝塚（15）や阿瀬津陰遺跡（16）、阿瀬津遺跡（17）、近世には延命寺跡（14）にみられるように、沿岸部に遺跡が形成される傾向がうかがえる。



第2図 有川郷周辺の遺跡 (s=1/25,000)

### 第3節 遺跡の調査履歴

浜郷遺跡の発見は、昭和32（1957）年に個人住宅内の地下貯水槽設置工事の際に人骨及びベンケイ貝製腕輪20数点、メンガタタカラ貝製垂飾品約10点が出土したことはじまる。

昭和41（1966）年には道路舗装工事・水道管埋設工事の際に、合口壺棺（弥生中期）（第4図3）や箱式石棺、タマキガイ製貝輪が人骨に装着された状態で多数発見された。このことから砂丘上に形成された浜地区集落の地下には、弥生時代の埋葬遺跡が広がることが予想され、昭和42（1967）年、昭和44（1969）年には長崎大学・別府大学・九州大学による合同調査（第一次・二次）が行われた。

調査では壺棺・壺棺・箱式石棺・土壙幕などの埋葬遺構とともに、合計61体の人骨が出土し、副葬品として丹塗壺（須玖I）や貝製管玉・貝輪・指輪などが出土した。

埋葬遺構のなかでも特に注目される1号石棺（第3図）は、被葬者を納める下部構造は通常の箱式石棺と同様だが、その上に板石を平積みして数段重ね上げながら次第に口を狭くするように積み上げ、一枚石で蓋をするという構造をもつ。この構造は神ノ崎遺跡（小値賀町）などの古墳時代に見られる地下式板積石室の形態に酷似しており、同様の形態をもつものが宇久松原遺跡（宇久町）でも確認されている。

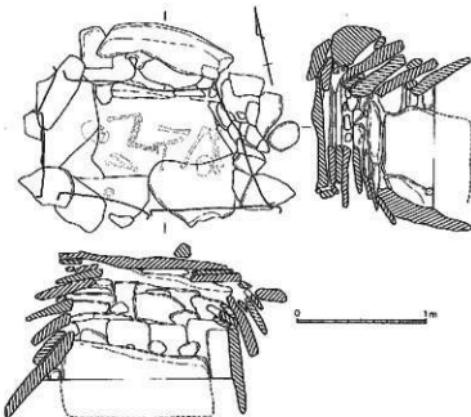
こうして一次・二次調査によって出土した副葬品や埋葬遺構の形態などから、弥生時代前期後半～中期前半の時期の埋葬遺跡であることが判明した。

これらを受け、長崎県教育委員会（以下県教委）では浜郷遺跡を県内重要遺跡に選定し、平成3年度から実施している重要遺跡の範囲確認調査の一環として平成6（1994）年に調査を実施した。印砂丘上の最高所にあたる位置から、北西方向に約300m離れた浜第2遺跡を中心に調査区を設定した。

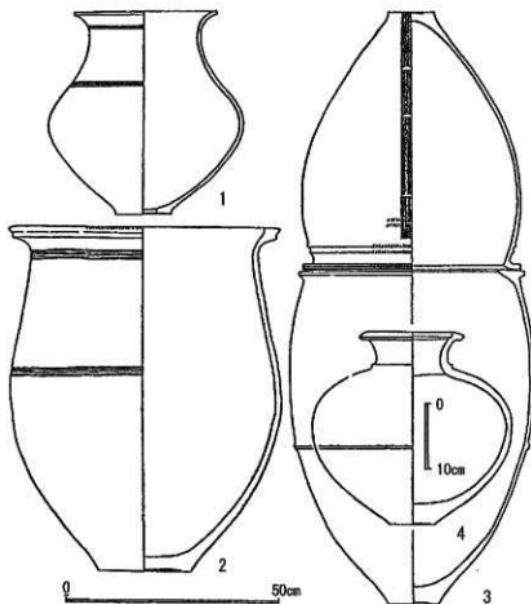
調査では2m×2mの試掘坑を計6箇所設けた。結果、弥生時代の遺構・遺物とともに検出されなかっただが、遺跡主体部が旧砂丘の最高部付近に限られることが判明した。

また平成12（2000）年にも県教委によって、有川町給食センター建設に伴う範囲確認調査が行われている。調査では炭化物混入の土壙が2基検出されたが、周囲及び遺構内からの出土遺物がみられず、時期は不明である。

上原遺跡は、古くから黒曜石やサヌカイト剝片が表面採取されていた。遺跡が広く周知されるようになったのは、昭和43（1968）年に宇久松原遺跡を調査中の小田富士雄氏から指導を仰ぎ、有川町教育委員会が有川中学校運動場の一隅を試掘したことにはじまる。その結果、表土を約15cm程掘り下げたところで検出された第II層（暗褐色



第3図 1号石棺実測図 (s=1/30)



第4図 壱・麥棺実測図 (s=1/10)

土)から板付II式土器片、須玖式土器片、城ノ越式土器片が出土した。第三層(茶色粘土層)からはピットが発見され、その内部からは剥片石器・黒曜石・石錐一個が出土した。

またII層下部とIII層上面から玄武岩製磨製石斧が出土した。鑑定の結果、福岡県糸島郡今山で製造されたものとわり、当時の交易範囲の一端が判明した。昭和44(1969)年には町立有川中学校のグランド南東側の上手に露出していた住居跡が墓地の造成に伴い破壊されることとなり、図面記録と遺物採集がおこなわれた。採集遺物は石鏃をはじめ大型石斧と板付II式・城ノ越・須玖式土器片がある。

また平成11(1999)年には長崎海洋気象台施設(アメダス)設置に伴う範囲確認調査が県教委によって行われている。調査区は、町立有川中学校グランドの東側に隣接する丘陵部にある。周辺にある墓地との標高差もみられず、遺物包含層の存在が予測されたが、2m以上にも及ぶ客土が厚く堆積し、包含層の有無は確認できなかった。しかしながら、今後も墓地等開発が丘陵部全体に及ぶことが予想されることから、遺跡の急速な実態把握が浜郷遺跡と同様に求められている。

#### 【引用・参考文献】

- 長崎県教育委員会1964『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書 第2集
- 長崎県教育委員会1966『県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV』長崎県文化財調査報告書 第130集
- 長崎県教育委員会1966『原始・古代の長崎県一資料編I』
- 長崎県土地対策室1982『有川・漁牛浦・佐尾』離島振興開発地域土地分類基本調査
- 小川富士雄1983『九州考古学研究 弥生時代篇』小田富士雄著作集3 学生社
- 有川町郷土誌編集・編纂委員会1994『有川町郷土誌』
- 有川町教育委員会1996『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書 第1集

## 第3章 調査

### 第1節 調査の方法（第5～7図）

浜鄭遺跡は昭和32（1957）年に発見されて以来、これまで複数回の発掘調査が実施されている。調査で得られた遺構・遺物については論文等によって部分的に紹介され、その学術的価値は高く評価されているものの、遺物の出土層位や遺構検出レベル等の情報までは開示されていない。

近年の住宅建設替えやインフラ整備に伴う公共工事に備え、本県では平成6（1994）年に県内重要遺跡範囲確認調査の一環で調査を実施したが、適地に発掘区を設定できなかったこともあり、行政上必要なデータを得るには至らなかった。

今回は遺跡の主要範囲である浜堤部の調査が可能になったことで、遺構・遺物の包含状況や現地表面からの深度を把握するため、浜堤を横断する方向に北東～南西へ4箇所のトレンチを設けて実施した。また、各トレンチには便宜上、北から順に1～4の番号を付した。トレンチ（Tと略す）の規模は $1.5m \times 4m$ のものが3箇所（T1・T3・T4）、 $1.5m \times 3m$ が1箇所（T2）である。



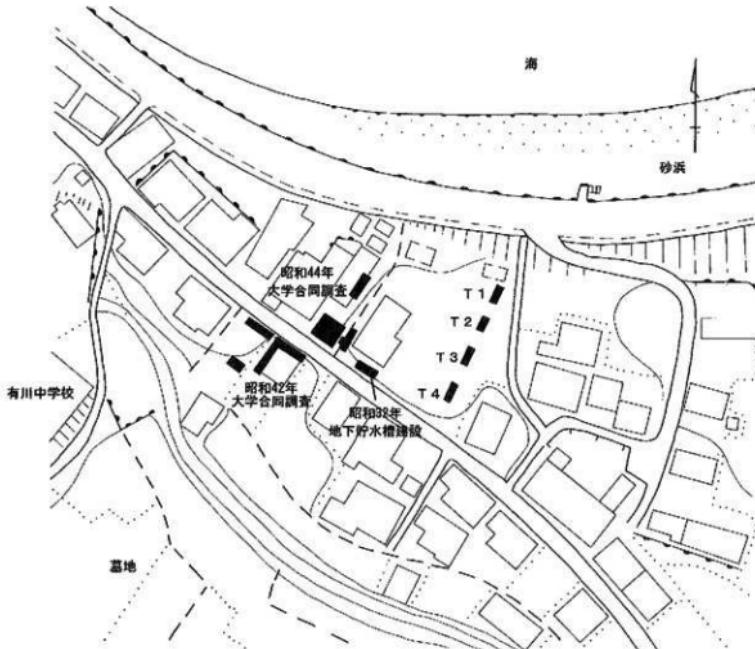
第5図 試掘坑配置図① (s=1/2,500)

## 第2節 層位

土層はトレンチ毎に差異はあるが、これまでの調査同様に表上部分は近現代の整地や擾乱による土壤改変が著しかったため、基本層位からは除外した（擾乱部位はグレーで表示）。結果的に次の6層に大別できた。1層は黄褐色砂層で、近世の遺物が混入する。2層は淡灰褐色砂層、3層は褐色砂層、4層は暗灰褐色砂層、5層は締まりのある明褐色砂層、6層はさらさらの白褐色砂層である。各トレンチともほぼ共通するのは1・2・5・6層で、1・2層では近世以降の遺物が出土し、弥生時代の遺構・遺物は6層から出土した。

今回は保存目的の範囲確認調査であり、調査の主眼を遺物包含層や遺構検出層位の確認においていたため、遺構・遺物の出土レベルより深く掘り下げるとは当初から念頭になかった。それでも、6層に達するまで地表下2m以上の砂層の掘削を要し、トレント壁面崩壊の危険性が伴うこともあり、結果的に安全面を考慮して断念せざるを得ないような状況であった。

平成6(1994)年の県内重要遺跡範囲確認調査は、今回の発掘区から北西に300mほど離れた浜第二遺跡で実施され、標高3.5m前後で東側海岸方向に傾斜する暗褐色粘質土の地山が確認されている。それぞれ独立して形成された浜堤上に営まれた遺跡ではあるが、6層以下の土層堆積状況を推測する手がかりにはなろう。砂層が成立する基盤層は共通するものがあったかもしれない。



第6図 試掘坑配置図② (s=1/1,000)

### 第3節 調査区の概要（第7～12図）

発掘調査は当初、 $1.5m \times 4m$  のトレンチを3箇所（T1・T3・T4）に設定して行った。その後、T3で遺構が検出されたことにより、 $1.5m \times 3m$  のトレンチを1箇所（T2）新設して遺構の広がりを追跡することにした。

各トレンチの様相は次のとおりである。

#### T1（第8図）

最も海側に設けたT1周辺は、現地表がT3・T4に比べて20cmほど高くなっている。もとは畑地として利用されていたようだ。表土には植物の根がびっしりと蔓延っていたが、近現代の整地や擾乱による上層の乱れはほとんどない。

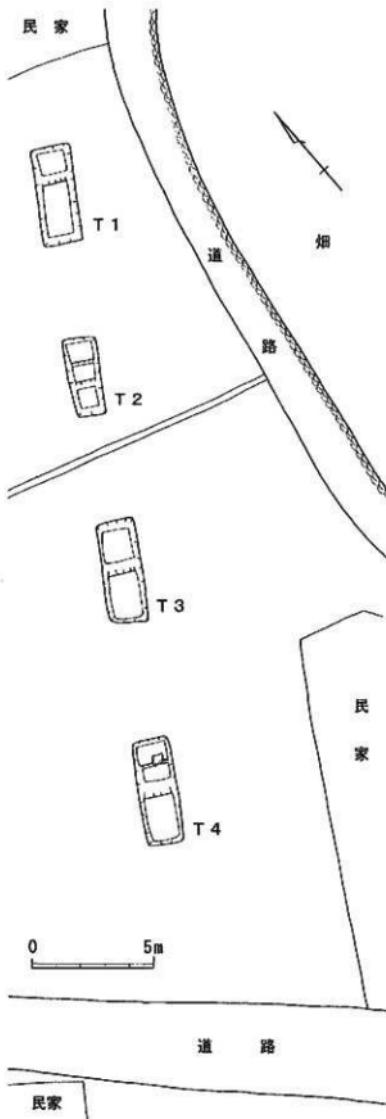
2層中には黒灰色炭化物が $75cm \times 30cm$ の範囲で厚さ15cmほどの凸レンズ状に堆積している部位があったものの、遺物等の出土は見られなかった。他のトレンチとの土層比較と検出レベルからみて、近世以降の所産と考えられる。

調査区内の掘削深度が1.5mを超えそうになつたため、作業の安全を考慮して、トレンチの北端部から1mの範囲だけをさらに掘り下げて地下の様子をうかがった。しかしながら、他端からも遺構や遺物の出土はなかった。

#### T2（第8図）

T2はT1と同様、これまで畑地として利用されてきた場所で、前述したようにT3での遺構検出に伴い追加設定されたトレンチである。

調査区北東隅の1層上面で、人頭大の礫を巡らし、赤褐色粘土を充填した胞衣壺遺構が確認された。断片的なものであったため正確な遺構規模は不明だが、 $55cm + \alpha \times 40cm + \alpha$  の範囲を20cmほど掘り進め、周間に礫を配している。礫は安山岩や砂岩が主で、部分的に2～3段積み重ねているようだ。礫を配した中央には陶器の壺が伏された状態で置かれていた。詳細に観察すると、壺は器高18cmで底平をなし、縦に半裁されているようである。壺と陶器壺の間は赤褐



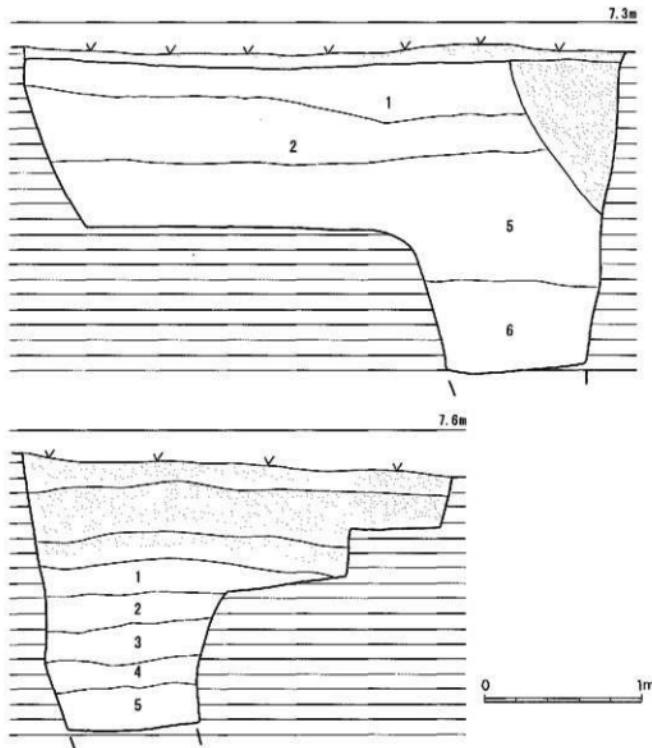
第7図 試掘坑配置図③ (s=1/200)

色粘土が充填されていた。遺構の検出レベルから判断して、近現代の産物と思われることから、最終的に遺構・遺物を取り上げることは行わなかった。習俗的には、アビの殻を伏せる行為と同様な意識が働いているのである。

T 1と同じく、掘削深度が1.5mを超えることが予想されたため、調査区の南端から1mの範囲だけを掘り下げ、十層の確認作業を継続することにした。2層以下では、5層の下層付近で炭化物が混入した砂の堆積層が壁面で観察できた。長さ40cm、厚さは5cm程度と思われるが、輪郭ははっきりしない。この他には遺構や遺物の出土はみられなかった。

### T 3 (第9・10図)

T 3・T 4は民家の敷地内に設けたトレーナーである。T 3は表土部分が固く締まっており、地表下70cmまでは近現代の擾乱が及んでいた。2~3層でようやく砂層に移行し、1mを超えた付近から、礫や骨・貝類に混じって18世紀以降の近世陶磁器類が出土するようになる。遺物で特徴的なのは、仏

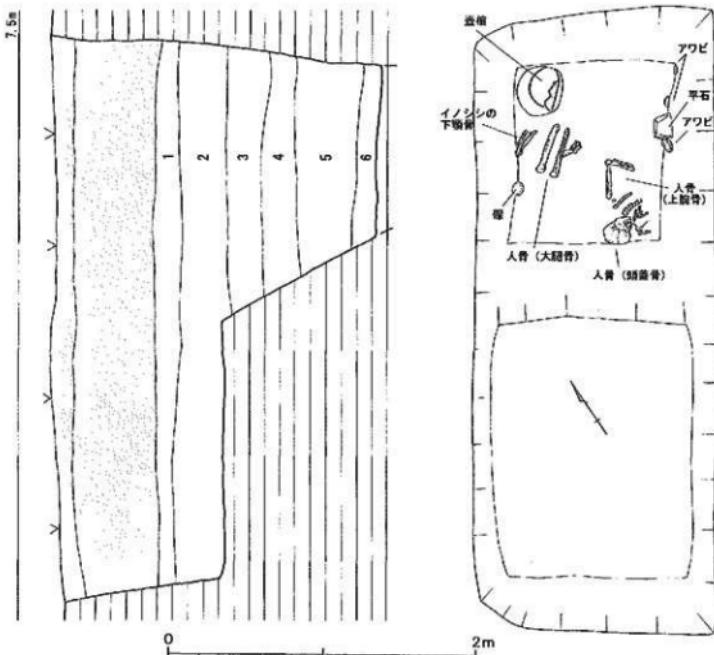


第8図 T 1(上)・T 2(下)土層堆積状況 ( $s=1/30$ )

瓶器等が疊や炭化物とともに出土することで、明確な遺構としては表れないが埋葬に関わる施設の存在を思わせる。ここでも調査深度が深くなることが明らかになった時点で、調査区の全面掘削を断念し、北側1.5mの範囲に限定して調査を進めていった。地表下1.5mほどで5層に移行した頃から繰まりのある砂層となり、下層付近で平石が出現したのを皮切りに、標高5.3~5.4mでアワビとイノシシの下顎骨が相次いで出土した。

標高5.3mを過ぎて次の6層に達すると、調査区の北西隅では壺棺が確認され、周辺の精査を行ったところ人間の大腿骨と頭蓋骨まで現れるようになった。墓擴の検出にも積極的に努めたが、1m×1.2mの狭小な範囲に遺構や人骨が密集して存在し、6層自体もさらさらした白褐色砂層であったことから、明確な掘り方を把握することは不可能であった。

人骨は頭蓋骨周辺の砂をハケで取り除いたところ、頸椎や鎖骨、上腕骨まで検出できた。大腿骨周辺では中足骨かと思われる部位までは探れたものの、それ以上は追跡できなかった。当初は頭蓋骨と大腿骨は一体のものと認識していたが、頸椎の方向からすると別個体と考えた方がよさそうである。頭蓋骨は眉弓・降起が発達し、乳様突起も大きいことから、男性である可能性が高いように思われる。壺棺は2つのアワビの下に直立気味に埋置され、検出当初から頸部を欠失した状態で確認された。



第9図 T3人骨検出状況① (s=1/30)

意識的に打ち欠かれたものであろう。掘り方の検出にも努めたが、人骨の墓壙と同様に断念せざるを得なかった。壙は胸部と頸部付け根の形状から推測すると、これまでの出土例と同じく城ノ越～須玖式段階のものであろう。頭蓋骨や大腿骨と壙棺の検出レベルはともに標高5.0～5.1m前後にあり、人骨の埋葬も壙の時期とほぼ同じ頃に比定されるものと考える。

#### T 4 (第11図)

T 4もT 3と同じく、表層部分には近現代の整地や擾乱が及び、北側では深さ1.7mにまで達するところもあった。3層は疊に混在して18世紀以降の近世陶磁器や目類が多数みられ、近隣のトレンチの状況とも符合する。

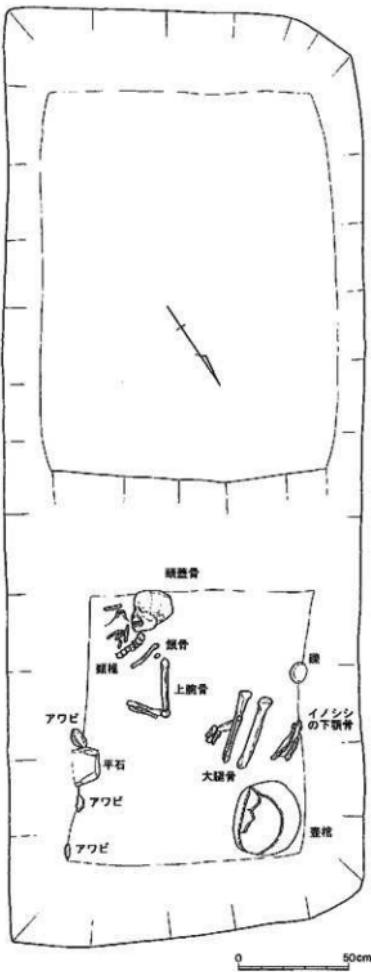
これまでの調査区同様、地表下1mほどに達した段階で北半部のみの掘り下げに切り替えたところ、6層上面で一辺が30cmの砂岩製平石を中心付近に据えた不明造構を検出した。

造構の平面形は径約1.5mの円～椭円形をなすと推測される。6層は全体的にさらさらした白褐色砂層 (5Y 6/2) を呈するのが普通であるが、当造構はそれよりやや暗い砂層 (5Y 5/3) で構成され、砂自体も締まっている。上色や土質が近似している5層から掘り込まれたと判断するのが妥当な見方かもしれない。第11図では便宜上7層と表記した。

平石を中心に造構の南側を半裁して50cmほど掘り下げたところ、造構は20～30cmの深さであることが判明した。ただし、遺物等の川土ではなく、造構の性格は不明である。平石の検出レベルは5.3m付近で、T 3の出土のアワビとイノシシの下顎骨とは標高的にも一致しており、何らかの標式的な意味合いか埋葬習俗のひとつであったかもしれない。

#### T 5～T 7 (第12・13図)

T 5～T 7はT 1～T 4のある浜堤背後の低丘陵上に調査区を設定し、発掘を行った。ここは『長崎県遺跡地図』では上原遺跡という名称で周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが、従来より浜郷遺跡に葬られた人たちの集落があったと想定されている場所で、一般的には同一集



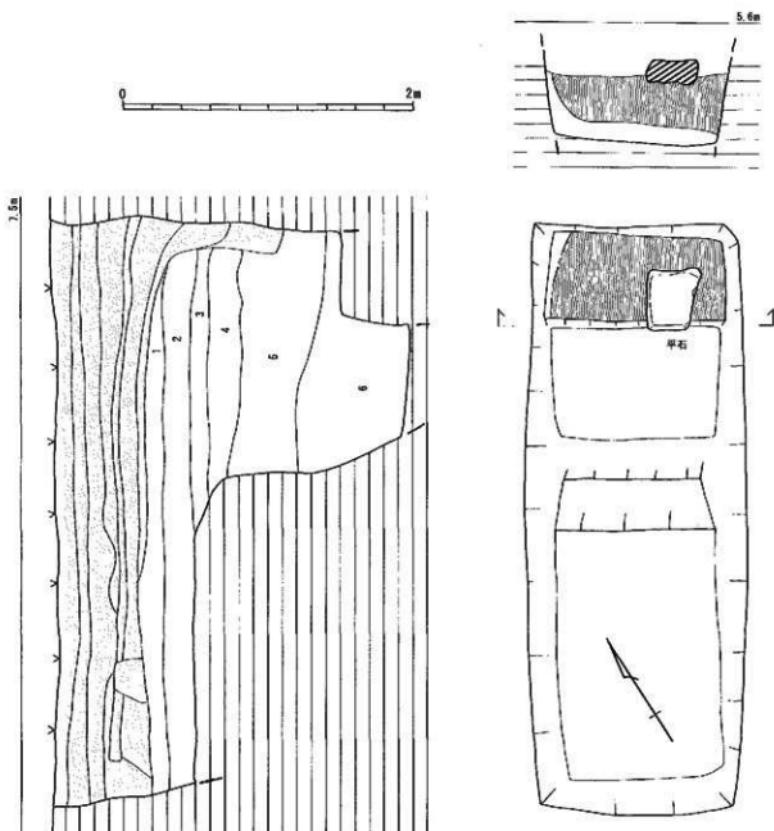
第10図 T 3 人骨検出状況② (s=1/20)

落の居住地と埋葬地という認識で包括されている。

調査区は恵念寺の墓地の一角にあたり、標高は13.5~14mを測る。現在は空き地となっているものの、今後は墓域の拡大が予想されそうな場所である。

丘陵を横断するように北東~南西方向へ3箇所のトレンチを設け、各トレンチには北から順に5~7の番号を付した。地形的にはT 5からT 7にかけて、緩やかな下り傾斜を示す。トレンチは1.5m×4mを基本としたが、T 5は後に調査の必要上から6m×7mにまで拡張を行った。

昭和43(1968)年に行われた発掘調査では、表土を15cmほど剥ぐと暗褐色土の遺物包含層が現れ、その下の茶褐色粘土層に柱穴が掘り込まれていたという。遺構検出面までは表上から40cmにも満たない

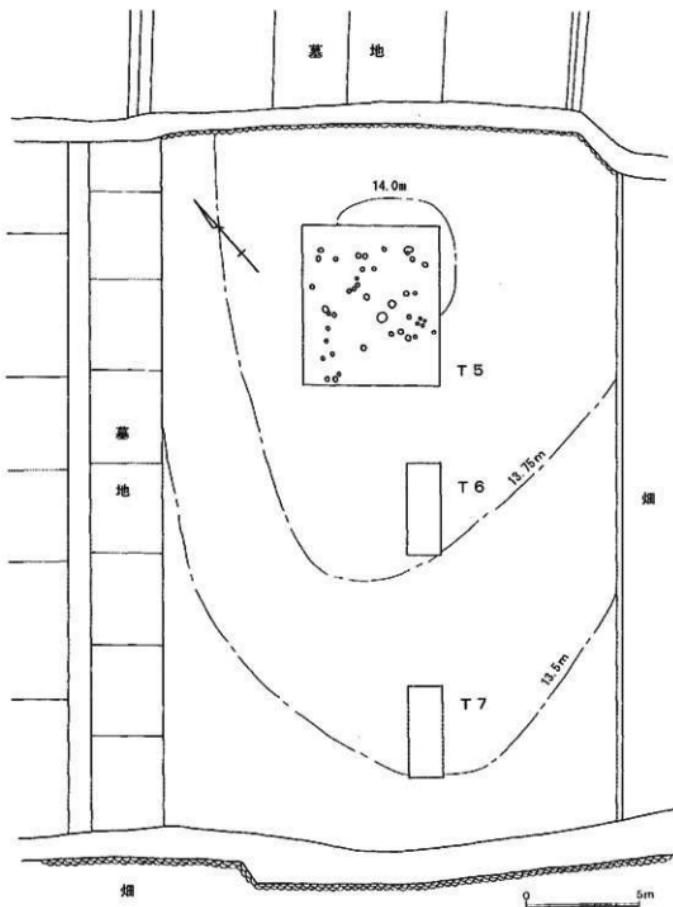


第11図 T 4 遺構検出状況 (s=1/30)

ようで、包含層や遺構の残存状況がどの程度なのか把握しておく必要があった。

調査の結果、T 6・T 7では表下10cmほどで赤褐色の地山があらわれ、削平や土取りで上がはほとんど失われていることが判明した。丘陵頂部に近いT 5では、地山直上に明茶褐色土の薄い堆積層がみられたため、拡張して精査を行ったところ、ピット44基と若干の遺物を確認することができた。

ピットは径30~40cm大が3基あるだけで、20cm以下のものが大半である。残存する深さは未発掘のため不明。遺物は弥生中期前半頃の土器底部片の他、表上からは中世の青磁や石鍋も出土した。



第12図 試掘坑配置図④ (s=1/200)

#### 第4節 出土遺物（第14図）

遺構に伴うものについては、基本的に取り上げを行わなかった。よってここでは、包含層の掘り下げや遺構検出段階で出土したもののみ報告する。

またT5～T7は一部にピット出土のものはあるが、大半は表土層からの川土である。

1は漆棺の肩部片。城ノ越式段階であろう。T3の6層出土。

2は口縁部片。中世の土鍋片か。T3の2層出土。

3は刻み目尖帯をもつ銅部片か。板付II段階。T5のピット出土（第13図）。4は滑石製石錠片。錠は小さく三角形断面をなす。T5出土。5は底部片。城ノ越段階。T5のピット出土（第13図）。6は管状土錠。T5出土。7は両端に使用痕のある石器。敲石か。時期は不明。T4の4層出土。8・9は錢貨で、新寛永である。8はT4出土。9はT5出土。

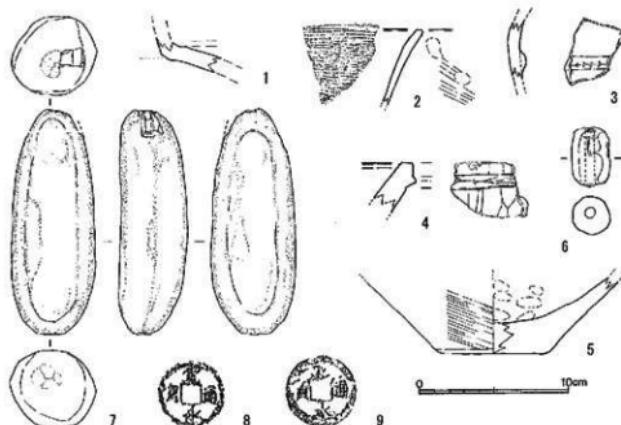
第13図 T5遺構検出状況 ( $s=1/100$ )

その他の遺物として、T4の5層から小野皿C群の染付皿底部や、T5からサヌカイト製スクレーパーが出土している。またT1～T4の表土層下の各砂層から貝類が出土した。大別して、コシダカガングラなどの巻貝類とコタマガイなどの2枚貝類がある。出土数全体の約8割近くを前者の巻貝類が占めている。

#### 【引用・参考文献】

小野正敏1982「15～16世紀の染付陶皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 第2号』

保育社1989『原色日本貝類図鑑』



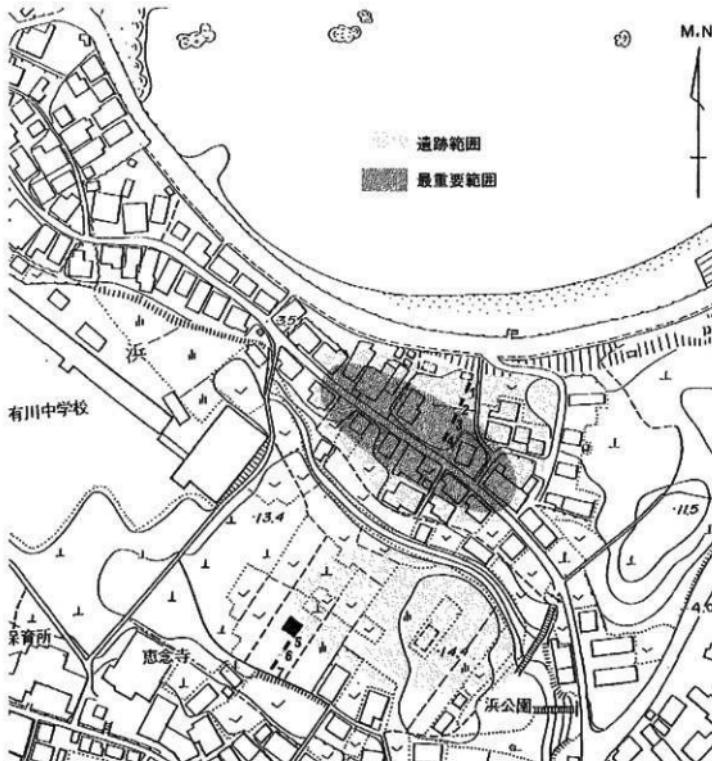
第14図 出土遺物実測図 ( $s=1/3$ , 8+9は $s=2/3$ )

## 第4章 総括 (第15図)

- ①浜郷遺跡の範囲等について
- ②T 4 検出の不明円形造構等について
- ③上原遺跡の残存状況と今後の保護措置等について

まず、浜郷遺跡の範囲については、調査結果を総合すると、6層中に弥生時代の遺構・遺物がみられるのは浜堤頂部に近いT 3・T 4までで、海側に広がる様相はなかった。古代から中世の間はほぼ欠落し、近世になって再び墓地等として利用されるようになったようである。ここ浜地区に集落が形成されたのは、整地層の状況や近世陶磁器の年代観からみて、概ね18世紀以降ではなかろうか。

有川は長崎県内でも有数の捕鯨の町として知られ、その始まりは慶長17(1612)年に求められる。しかしながら、大村藩や平戸藩でも捕鯨操業が開始されたことで、一時は休業状態にまで陥った。そ



第15図 浜郷遺跡範囲 (s=1/2,000)

の後、有川湾内の漁業権争いに勝訴した元禄4(1691)年以降、瀬戸内方面から漁業者を雇い入れて操業を再開し、漁獲量九州第一位を誇るほどの最盛期を迎えたという。漁業者は専ら上原台地の北～西側に集落を形成したようであるが、多数の人が押し寄せたことで、本来は無縁の空間であった浜地区にまで居住域が拡大していったとも考えられよう。

砂丘の成立には沿岸流と海からの季節風が影響しているといわれ、吹き上げられた砂は浜郷遺跡の背後にある上原台地が障害物となって失速し、堆積を繰り返して横列砂丘を形成したようである。よって、砂丘と遺跡範囲は密接な関係にあり、台地のごく限られたエリアを周知の埋葬文化財包蔵地とする『長崎県遺跡地図』の記載は首肯できる。あえて浜郷遺跡で遺構・遺物が出上する最重要地区を想定すれば、これまでの調査事例を考え合わせると、横列砂丘のピークを縱貫する町道に沿った両側25m前後の範囲ということになろう。

次に、T4で検出された不明円形遺構は、その検出レベルと層位から判断して、T3出土のアワビやイノシシの下顎骨とほぼ同時期のものと考えられる。ただし、両者を比較した場合、いくつかの相違点や共通点も認められる。

前者は掘り方を有し、埋葬位置の上部層で検出され、中央部に据えた平石の他には遺物が伴わなかった。後者は明確な掘り方を有せず、埋葬施設の近くや埋葬位置上層部で発見され、それ自体が被葬者への供物として副葬されたと考えられる点などである。両者は標高は5.3m前後にあり、埋葬遺構が5.0m前後であるから、30cmほど上位に置かれたことになる。

固有の習俗や精神性の有無をここで論じることはできないが、遺体や壺棺を砂で被覆した後の人為的行為であることは確実である。これまでの調査資料を検討しても、被葬者の年齢や性別、埋葬方法の違いがこれらの行為と相關関係にあるとは思われず、副葬や習俗に加え、墓標的な意識が働いていた可能性を指摘するにとどめたい。

最後に、上原遺跡は河川と海に挟まれた低丘陵台地にあり、古くは円福寺跡や常楽寺跡等の中世寺院があったとされる。現在、丘陵上部には町立有川中学校・恵念寺が立地し、民家は専ら丘陵下の裾部に集中している。

この遺跡が広く周知されるようになったのは、浜郷遺跡の学術調査と機を同じくする。昭和43(1968)年に宇久松原遺跡を発掘調査中の小田富士雄氏から指導を仰ぎ、町教育委員会が有川中学校の運動場の一隅を試掘したことに始まる。その結果、表土を15cm程度掘り下げたところで、径3.45mの竪穴式住居跡と柱穴が確認された。伴出土器が弥生時代中期の年代を示していたことから、浜郷遺跡を墓域にもつ集落遺跡であるという見方が強まり、以後両者の関連が指摘されるようになる。

今回の調査によって遺構検出面までは極めて浅いことが判明し、学校建設や墓地等の開発が著しい丘陵北西部では遺構の大半は失われている可能性が高くなっている。一方、まだ畠地が残っている南東側はかるうじて旧地形をとどめているようだ。ただし、付近には寺跡があったことからみて、主体は中世と推測される。今後、弥生時代集落跡の発見が期待できるとすれば、T5の北東～東側に広がる雑種地付近であろうと思われる。

浜郷遺跡と上原遺跡はこれまで墓域と居住域という位置づけがなされながら、特異な埋葬習俗や豊富な副葬品から、浜郷遺跡のみにスポットがあてられていたきらいがある。今回、浜郷遺跡で弥生時代の遺構・遺物が出土するレベルは現地表より2m以上の深部にあり、遺存状態も良好なことが判明

したこと、遺跡破壊の緊急性は薄らいだ。

一方、上原遺跡は範囲や内容等についての情報不足が明らかになった。今後は巨視的に遺跡を捉えて内容把握を行う必要があると思われ、関係市町村教育委員会とも密接に連絡を取りながら、積極的に遺跡保護のためのデータ収集に務めていきたい。

#### 【参考文献】

- 小田富士雄 1970 「五島列島の弥生文化」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2号  
(後に、小川富士雄著作集『九州考古学研究 弥生時代編』 学生社 1983 所収)
- 有川町郷土誌編集・編纂委員会編 1994 『有川町町郷上誌』
- 宮崎貴夫 1995 「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化—西北九州地域との比較を中心として—」  
『風土記の考古学』5 肥前国風土記の巻 同成社
- 長崎県教育委員会編 1996 『原始・古代の長崎県』資料編1
- 古門雅高編 1996 「浜辺遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV』長崎県文化財調査報告書第130集 長崎県教育委員会

# 図 版

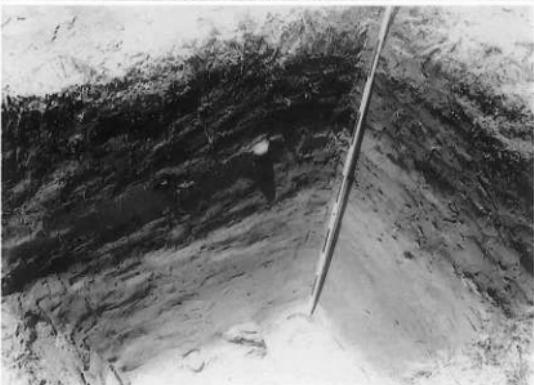
図版 1



1 調査風景



2 T 1 西壁



3 T 3 西壁

図版 2



1 T 3 アワビ検出状況



2 T 3 遺構検出状況



3 T 3 イノシシの下顎骨



1 T 3 大腿骨



2 T 3 頭蓋骨



3 T 4 遺構検出状況

図版 4



1 T 5~7 調査区全景



2 T 5 造構検出状況



3 T 5 ピット検出状況

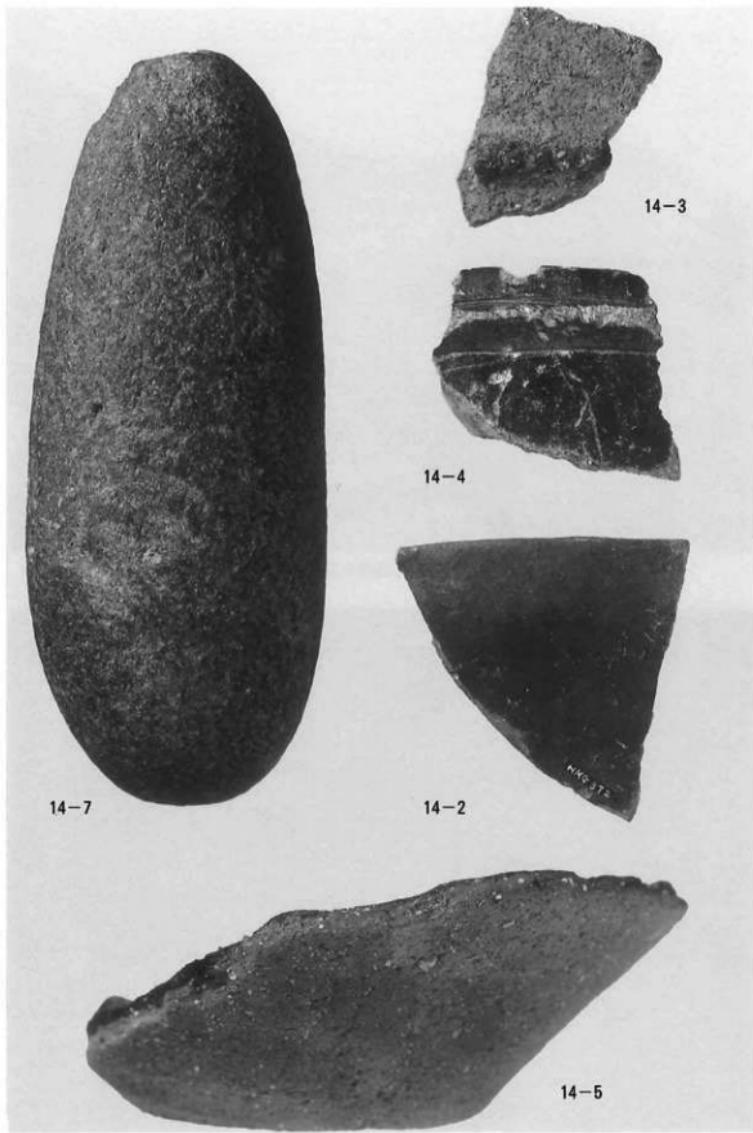


1 昭和44年当時の浜郷遺跡



2 昭和44年調査時の検出造構（長崎大学医学部撮影）

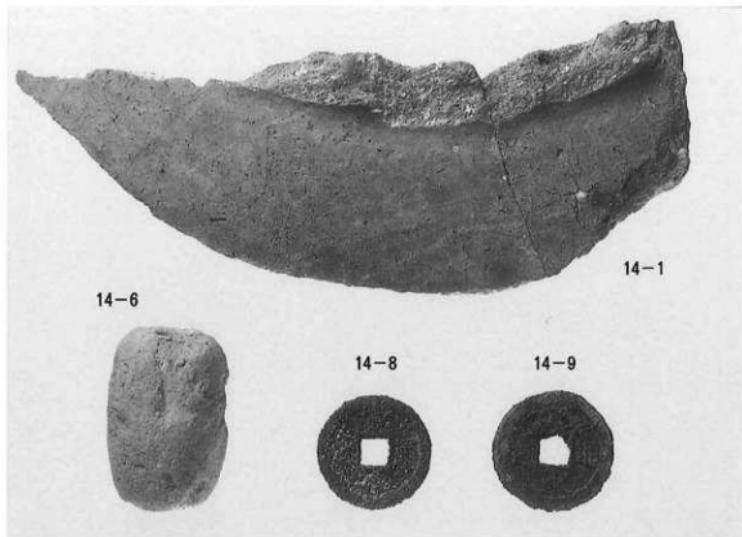
図版 6



出土遺物①

※ 第14図の番号に対応

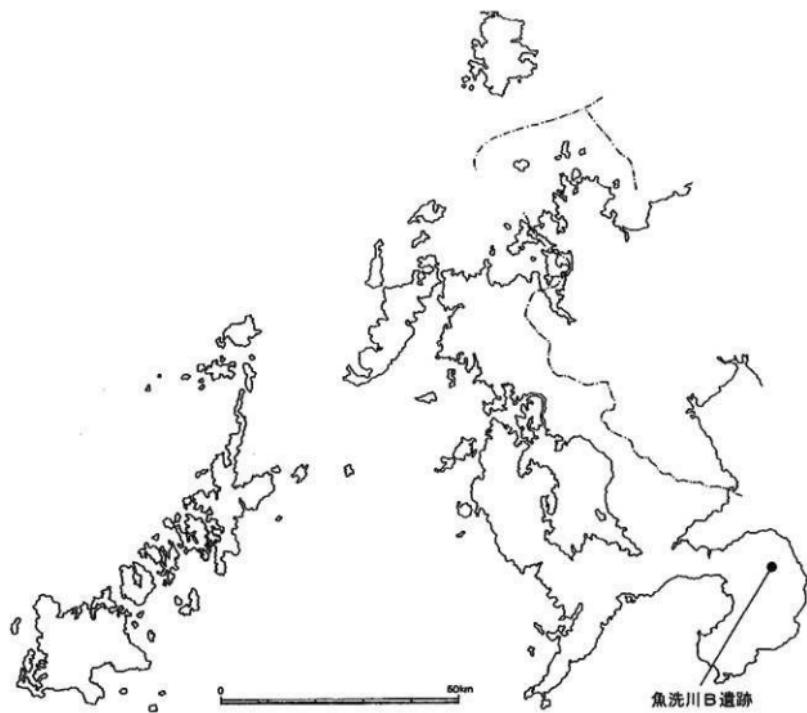
図版 7



出土遺物②

※ 第14図の番号に対応

## 第II部 魚洗川B遺跡（雲仙市国見町）



遺跡位置図

## 例　　言

- 1 本書は長崎県雲仙市国見町金山名横道上1448-28他に所在する魚洗川B遺跡の発掘調査報告書である。(平成17年10月市町村合併により南高来郡国見町は雲仙市国見町となった。)
- 2 調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり、旧国見町教育委員会の協力を得て、平成16年10月25日から同年11月12日にかけて実施した。
- 3 調査関係者は次のとおりである。

調査担当 長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	山下 英明
	文化財調査員	山田 英明
調査協力 旧国見町教育委員会	社会教育係	辻田 直人
- 4 遺構実測は調査担当者が行った。遺物実測は土器を山下が行い、石器は竹田ゆかり・中尾篤志の協力を得た。トレスは和田美加・浜崎美加が行った。
- 5 本書関係の写真撮影は、調査時の遺構については山下が行い、遺物写真は平出賢明・竹田の協力を得て、山下が撮影した。
- 6 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 7 土層及び土器の色調は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)による。
- 8 本書における遺物・写真・図面等は、長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
- 9 本書の執筆、編集は山下が行った。

## 本　文　目　次

### 第1章 経過

第1節 調査に至る経緯	31
第2節 調査組織	31

### 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	32
第2節 歴史的環境	32
第3節 調査履歴	36

### 第3章 調査

第1節 調査の方法	38
第2節 屢位	38
第3節 調査区の概要	41
第4節 遺構	41
第5節 遺物	44

### 第4章 総括

## 挿 図 目 次

遺跡位置図	とびら
第1図 国見町周辺図 (s=1/400,000)	31
第2図 百花台周辺遺跡 (s=1/25,000)	33
第3図 調査区配置図 (s=1/2,500)	35
第4図 調査塙配置図① (s=1/500)	38
第5図 調査塙配置図② (s=1/500)	39
第6図 調査塙配置図③ (s=1/500)	40
第7図 土層断面実測図 (s=1/40)	42
第8図 E 8 区・F14区土層断面及び遺構・遺物検出状況実測図 (s=1/40)	43
第9図 E 8 区土壤実測図 (s=1/20)	44
第10図 遺物実測図 (s=1/2・1/3)	45
第11図 魚洗川B 遺跡範囲 (s=1/2,500)	48

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	34
第2表 百花台遺跡群調査履歴	36

## 図 版 目 次

図版 1 (遺跡遠景・遺跡近景・調査風景)	52
図版 2 (H12区土層・F 15-1区土層・C 13-1区土層)	53
図版 3 (E 8 区上層・遺構検出状況・遺物検出状況)	54
図版 4 (F 14区上層・遺構検出状況・遺物検出状況)	55
図版 5 (石器)	56
図版 6 (土器)	57

## 第1章 経過

### 第1節 調査に至る経緯

百花台遺跡群は、島原半島北部の雲仙市国見町に所在し、標高200～280mを測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に展開している。この遺跡群は百花台A～F遺跡および魚洗川A～C遺跡からなり、魚洗川B遺跡は、この遺跡群中最南端に立地する。百花台遺跡群の調査は、1963（昭和38）年の和島誠一・麻生優による学術調査にはじまり、1982～1993（昭和57～平成5）年には長崎県教育委員会により百花台広域公園建設、県道国見雲仙線改良工事、全国樹木祭会場整備事業などに伴う調査がおこなわれている。また、これとはほぼ同時期に同志社大学・県立国見高校からなる百花台遺跡発掘調査による学術調査が実施されている。これらの調査によって、縄文時代の遺物包含層のほか、IH石器時代の文化層が層位的に検出されており、この時代の石器組成や構造を解明する上で貴重な成果が上がっている。

このような遺跡の重要性から、長崎県教育委員会では百花台遺跡群を重要遺跡として位置づけている。今回の調査は、重要遺跡情報保存活用事業に伴うもので、2004（平成16年）度地域拠点遺跡内容確認発掘調査として実施したものである。本事業は、県内の重要遺跡について平面的な広がりや遺物包含層の有無、遺構の分布状況等を範囲確認調査によって把握し、重要遺跡の保護を行うことを目的としている。また、この調査で得られた資料は、開発事業との円滑な調整や協議資料としても活用が図られている。折しも長崎県の事業として、遺跡に隣接する百花台広域公園の拡張計画が策定されており、遺跡内に工事が及ぶ計画であったため、2003（平成15）年度には開発事業関連予備調査に伴う範囲確認調査も実施された。この調査においては遺構・遺物等検出されなかったが、未調査の地区もあり、今回の範囲確認調査を実施する運びとなった。

### 第2節 調査組織

2004（平成16）年度の発掘調査は長崎県教育庁学芸文化課が主体となり、旧国見町教育委員会の協力を得た。なお、この調査の関係者は例言に記したとおりである。



第1図 国見町周辺図 (s=1/400,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

長崎県雲仙市国見町（註1）は島原半島の北部に位置し、南北12km、東西6km、面積37.59㎢の町域を持つ。西は同市瑞穂町、東は栗谷川を隔て島原市有明町に接している。また、南は普賢岳、国見岳、妙見岳などの雲仙火山群に接し、北は有明海に面している。町の東寄りを流れる土黒川は国見岳北麓に源を発し、途中土黒山西と合流し有明海に注いでいる。この河口付近に多比良港があり、ここから熊本県長州港まで海上直線距離で約14kmである。

魚洗川B遺跡を含む百花台遺跡群は、土黒川を河口から約7.5kmさかのぼった火山性山麓扇状地の扇頂部付近に分布し、土黒川が形成した段丘崖上に立地する。標高は約200～280mである。この山麓扇状地は、雲仙火山活動の初期に堆積した雲仙基底火山碎屑岩で構成され、竜石層とも呼ばれる角閃石安山岩の亜角礫～円礫を含む砂礫層よりなる。この扇状地は遺跡付近で3～4度の緩やかな角度で北に傾斜し、西の上黒川と東の栗谷川との間に平坦な山麓地形をつくり出している。

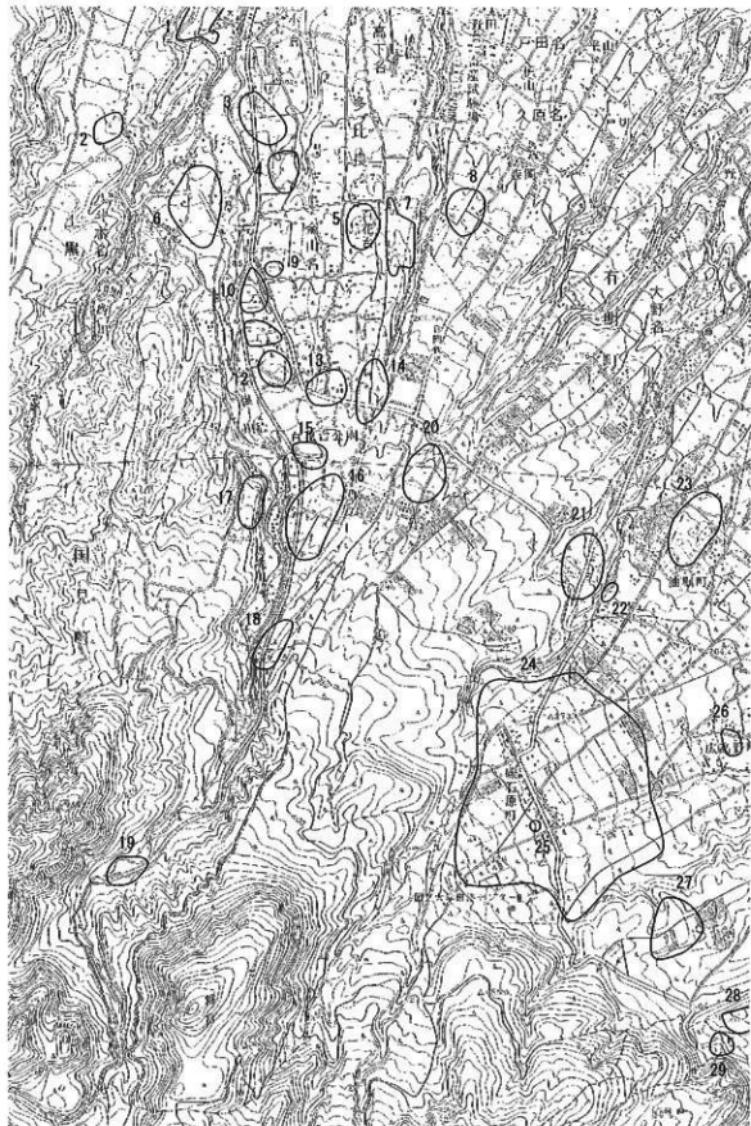
今回、調査を行った魚洗川B遺跡は、百花台遺跡群中最も標高の高い南端に位置する。調査地点は公園化に伴い公有化されているが、それ以前は畠地として利用されていたところである。

### 第2節 歴史的環境（第2図・第1表）

ここでは、百花台遺跡周辺の歴史的環境について述べることとするが、標高150m以上の百花台山麓地における遺跡の傾向として、弥生時代以降の遺跡が希薄でほとんど周知されていない。また、今回の調査においては縄文時代の遺構・遺物が主体をなすため、この時期に重点を置いた記述をおこなうこととする。

旧石器時代の遺跡としては、百花台遺跡群の他に3小ヶ倉A遺跡、4小ヶ倉B遺跡、18魚洗川D遺跡がある。小ヶ倉A・B遺跡は、百花台B遺跡の北500～700mに位置し細石器や剥片が出土している。魚洗川D遺跡は、魚洗川B遺跡の南500mに位置し、剥片尖頭器・細石器が出土している。いずれも百花台遺跡群に隣接することから関連の深い遺跡として捉えられよう。また、百花台遺跡群においては、Ⅲ～Ⅶ層の各層から遺物の出上が認められ、この地域に継続的な人々の営みがあったことがわかる。

縄文時代は草創期以降、各時期の遺物の出土が知られる。百花台遺跡群の細石器石器群の編年を行った川道寛氏によれば、18魚洗川D遺跡、10百花台B遺跡、12百花台D遺跡、3小ヶ倉A遺跡などの細石器石器群が草創期に位置づけられるという（川道2004）。このうち小ヶ倉A遺跡からは、細石器と押引文段階の土器が共伴して出土している。早期でまとまった遺物が出土しているのは、百花台遺跡群で、火穴遺構・集石遺構や押型文・捺糸文・塞ノ神式などの土器が出土している。この他に貝殻条痕系土器がまとまって出土した3小ヶ倉A遺跡や押型文土器が採集された8森岡遺跡などがある。前期の遺跡は分布が希薄で、周辺では百花台遺跡群や魚洗川D遺跡に限られ、轟式・舟堀式などの土器が検出されている。また、中期・後期も同様で百花台遺跡群、魚洗川D遺跡から船元式・阿高式・西平式・三万田式の土器が確認されている程度で、周辺への拡がりを持たない。ただし、同じ国見町内で、標高8～12mの海岸部付近には、後期の良好な資料が出土した後遺跡などがあり、この時期の代表的な遺跡である。晩期になると百花台山麓地域では、百花台遺跡群において晩期前半～中葉（黒川式）の土器が検出されている。また、1水口田遺跡、7泥谷遺跡において後期・晩期の土器が確認さ

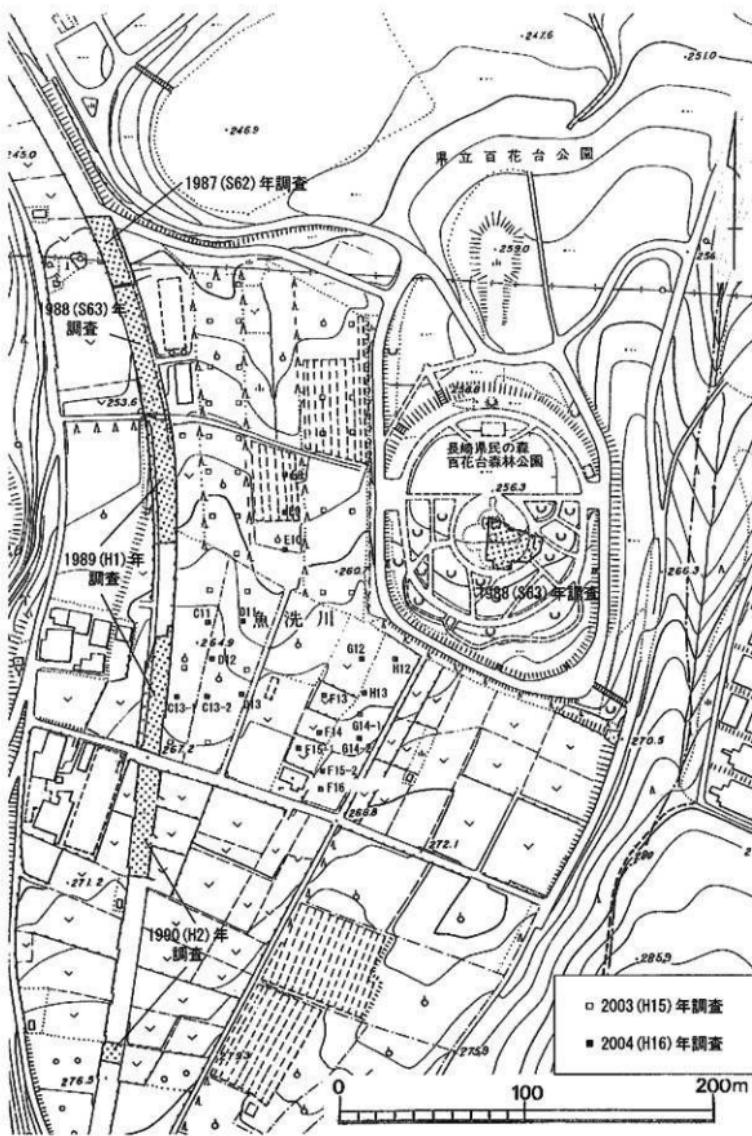


第2図 百花台周辺遺跡 (s=1/25,000)

れている。栗谷川を隔てた、島原市有明町側には縄文晚期の大集落である24砾石原遺跡がある。この遺跡は1955（昭和30）年以来10数次にわたる調査が行われ、縄文晚期（黒川式）の上器をはじめ、住居跡・方形石組遺構・小児カメ棺墓・集石墓などの遺構や、勾玉・管玉・石刀・扁平打製石斧など多くの資料が出上り、縄文晚期におけるこの地域の核となる集落跡であると考えられている（宮崎・伴1990）。この他、晚期前半の小児カメ棺が出土した20二ッ石遺跡、晚期前半を主体とする21東鹿野遺跡、晚期中～後半の遺物が大量に出土した29肥賀太郎遺跡など、砾石原などを中心とした晚期遺跡の集中が標高200～300m付近に見られる。晚期後半以降になると、百花台周辺においては遺跡の分布が希薄となり、この状況は次の弥生時代以後も続いていくことになる。

番号	遺跡名称	所 在 地	種 別	立地	時代
1	水口田遺跡	雲仙市国見町土黒下八斗木	遺物包含地	丘陵	縄文
2	泥測遺跡	" 八斗木名字泥測	"	台地	旧石器
3	小ヶ倉A遺跡	" 金山名字堀圓	"	丘陵	旧石器・縄文
4	小ヶ倉B遺跡	" 金山名字堀圓	"	丘陵	旧石器・縄文
5	小ヶ倉C遺跡	" 金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
6	栗山遺跡	" 八斗木名字栗山	"	台地	縄文
7	泥谷遺跡	" 金山名字泥谷	"	台地	縄文・弥生
8	森岡遺跡	島原市有明町戸田名字横道	"	台地	縄文
9	百花台A遺跡	雲仙市国見町金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
10	百花台B遺跡	" 金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
11	百花台C遺跡	" 金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
12	百花台D遺跡	" 金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
13	百花台E遺跡	" 金山名字堀圓	"	丘陵	旧石器・縄文
14	百花台F遺跡	" 金山名字堀圓	"	台地	旧石器・縄文
15	魚洗川A遺跡	" 金山名字横道上	"	丘陵	旧石器・縄文
16	魚洗川B遺跡	" 金山名字横道上	"	台地	旧石器・縄文
17	魚洗川C遺跡	" 八斗木名字上原	"	丘陵	旧石器
18	魚洗川D遺跡	" 金山名字横道上	"	丘陵	旧石器・縄文
19	魚洗川E遺跡	" 矢筈75林班3-31	"	丘陵	旧石器・縄文
20	ニツ石遺跡	島原市有明町戸田名字地蔵社	"	丘陵	縄文
21	東鹿野遺跡	" 大三東字東鹿野	"	丘陵	縄文
22	一本松遺跡	" 大野名一本松高野	"	台地	縄文
23	上油堀遺跡	" 三会油堀町上油堀	"	河岸段丘	縄文
24	砾石原遺跡	" 有明町大野名一本松高野 " 三会砾石原町	"	台地	縄文
25	砾石原古墓	島原市三会砾石原町	墳墓	丘陵	平安
26	大タブ沢遺跡	" 三会広高野町大タブ沢	遺物包含地	台地	縄文・中世
27	馬渡遺跡	" 立野町馬渡	"	丘陵	縄文
28	平の山A遺跡	" 杉谷北千本木町平の山	"	丘陵	縄文
29	肥賀太郎遺跡	" 杉谷北千本木町肥賀太郎	"	丘陵	縄文

第1表 周辺遺跡一覧



第3図 調査区配置図 (s=1/2,500)

### 第3節 調査履歴（第3図・第2表）

百花台遺跡の発見は、1955（昭和30）年頃島原市在住の古田正隆によって遺物が採集されたことを契機とするが、その後、1960年代・1980年代の学術調査や開発に伴う発掘調査が数次にわたり実施されている。ここでは、百花台遺跡群のなかの魚洗川B遺跡の調査履歴について述べる。

1987（昭和62）年～1990（平成2）年には、県道雲仙国見線改良工事に伴う発掘調査が長崎県教育委員会により4次にわたり実施された（註2）。調査地は遺跡の西側で、現県道下にあたる。調査は年度ごとに北から順次行われた。この調査において、IV～VI層から旧石器時代の集石遺構・土壙・疊群などの遺構やナイフ形石器・台形石器・台形様石器・剥片尖頭器・搔器・石核などの遺物が出土している。また、II～III層から縄文早期の炉跡・落とし穴遺構・土壙などの遺構や塞ノ神式土器・梢円押型文土器・石斧・石鎚・石皿・たたき石・スクレーパー・石核、晚期の土器などが出土している。

番号	調査開始日	調査終了日	遺跡名	調査の原因	調査の種別	調査面積	調査主体	文献
1	1982/7/5	1982/8/30	百花台D遺跡	公園造成	範囲確認	176	長崎県教育委員会	長崎県-078集 長崎県-092集
2	1982/7/20	1982/8/8	百花台遺跡群	学術調査	一		同志社大・國見高校 國見町教育委員会	「百花台1982 第1次発掘調査報告書」 1983
3	1983/3/15	1983/3/30	百花台遺跡群	県道改良工事	範囲確認	80	長崎県教育委員会	長崎県-078集 長崎県-116集
4	1983/4/11	1983/6/4	百花台D遺跡	公園造成	範囲確認	188	長崎県教育委員会	長崎県-078集 長崎県-092集
5	1983/6/6	1983/10/4	百花台D遺跡	公園造成	本調査	1,207	長崎県教育委員会	長崎県-078集 長崎県-092集
6	1983/8/13	1983/8/20	百花台東遺跡	学術調査	一	49.5	百花台遺跡発掘調査團 同志社大-008集	
7	1983/10/5	1984/1/25	百花台D遺跡	県道改良工事	本調査	921.95	長崎県教育委員会	長崎県-116集
8	1984/4/9	1984/7/18	百花台C遺跡	県道改良工事	本調査	100	長崎県教育委員会	長崎県-116集
9	1984/4/9	1984/7/18	百花台D遺跡	県道改良工事	本調査	730	長崎県教育委員会	長崎県-116集
10	1984/7/9	1984/11/16	百花台D遺跡	公園造成	本調査	1,260	長崎県教育委員会	長崎県-078集 長崎県-092集
11	1984/7/24	1984/8/5	百花台東遺跡	学術調査	一	57.5	百花台遺跡発掘調査團 同志社大-008集	
12	1985/3/18	1985/3/30	百花台東遺跡	学術調査	一	68.25	百花台遺跡発掘調査團 同志社大-008集	
13	1985/4/8	1985/8/30	百花台B遺跡	県道改良工事	本調査	810.4	長崎県教育委員会	長崎県-116集
14	1985/4/8	1985/8/30	百花台C遺跡	県道改良工事	本調査	246.4	長崎県教育委員会	長崎県-116集
15	1985/7/1	1985/11/9	百花台D遺跡	公園造成	本調査	1,100	長崎県教育委員会	長崎県-092集
16	1986/4/14	1986/7/19	百花台B遺跡	県道改良工事	本調査	1,090	長崎県教育委員会	長崎県-116集
17	1987/3/15	1987/4/1	百花台東遺跡	学術調査	一	116.75	百花台遺跡発掘調査團 同志社大-008集	
18	1987/4/6	1987/11/7	百花台B遺跡	県道改良工事	本調査	2,200	長崎県教育委員会	長崎県-116集
19	1987/11/9	1987/11/13	魚洗川A遺跡	県道改良工事	試掘	24	長崎県教育委員会	長崎県-116集
20	1988/2/1	1988/2/13	魚洗川B遺跡	植樹祭会場造成	範囲確認	84	長崎県教育委員会	長崎県-095集
21	1988/3/7	1988/3/31	魚洗川A遺跡	県道改良工事	本調査	400	長崎県教育委員会	長崎県-116集
22	1988/4/6	1988/5/24	魚洗川B遺跡	植樹祭会場造成	本調査	550	長崎県教育委員会	長崎県-095集
23	1988/6/6	1988/6/10	魚洗川A遺跡	県道改良工事	本調査	800	長崎県教育委員会	長崎県-116集
24	1988/6/17	1988/9/9	百花台遺跡群	県道改良工事	本調査		長崎県教育委員会	
25	1988/9/30	1988/10/6	魚洗川A・B遺跡	県道改良工事	試掘	39.5	長崎県教育委員会	長崎県-116集
26	1989/5/8	1989/8/26	魚洗川A・B遺跡	県道改良工事	本調査	1,470	長崎県教育委員会	長崎県-116集
27	1990/4/9	1990/4/20	魚洗川B遺跡	県道改良工事	試掘	56	長崎県教育委員会	長崎県-116集
28	1990/6/18	1990/8/18	魚洗川B遺跡	県道改良工事	本調査	700	長崎県教育委員会	長崎県-116集
29	2003/1/20	2003/2/4	百花台遺跡群	保存目的	範囲確認	88	長崎県教育委員会	長崎県-116集
30	2004/10/25	2004/11/12	魚洗川B遺跡	保存目的	範囲確認	78	長崎県教育委員会	本報告書
31	2005/11/30	2006/12/22	魚洗川A・B遺跡	保存目的	範囲確認	90	長崎県教育委員会	

第2表 百花台遺跡群調査履歴

1988（昭和63）年には全国植樹祭会場造成工事に伴う発掘調査が、同じく長崎県教育委員会によって実施された。調査地点は、遺跡の北西側で、現在「県民の森百花台森林公園」となっている所の中心部分である。基本土層は百花台遺跡群と同様の堆積状況であるが、II層は全面的に削平され、III層も部分的に残存しているにすぎない。調査の結果、旧石器時代のナイフ形石器・台形様石器・削器・石核などがIV～VI層から出土した。縄文時代の遺物は包含層が残っておらず、表土や表採品にとどまるが石鏃や石斧などが確認されている。また、遺物を伴わない落とし穴状の土壙が検出されており、掘り込まれた層や覆上から縄文時代早期の可能性が指摘されている（副島・伴1989）。

2003（平成15）年には、百花台広域公園の拡張計画に伴う範囲確認調査を長崎県教育委員会が実施した。工事予定地内に、31箇所の試掘 sondageを設定し調査を行ったが、IV層上面まで削平されており、縄文時代の包含層は確認されていない。また、IV層以下は百花台遺跡群の基本層序が確認されたが、遺構・遺物とともに検出されなかった。（和田2005）

これまでの調査で、旧石器から縄文晩期までの遺物が確認されているが、ナイフ形石器を主体とする後期旧石器時代の石器群が魚洗川B遺跡を代表する文化層であろう。しかし、これまで削平され確認されることが少なかった縄文時代の包含層が部分的にはあるが残存していたことが今回判明した。今後、縄文時代の文化層についても更に留意していく必要があろう。

【註】（註1）旧南高米郡国見町は、2005（平成17）年10月11日、瑞穂町・吉妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串町と合併し、雲仙市国見町となった。

（註2）1994年に刊行された報告書（田川1994）で魚洗川A遺跡として報じられている一部は、長崎県遺跡地図（長崎県教育委員会1994）では魚洗川B遺跡として登録されている。

#### 【引用・参考文献】

- 川道克編 2004 「第1部 百花台遺跡群」『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書』  
長崎県文化財調査報告書第176集 長崎県教育委員会
- 副島和明・伴耕一朗編 1989 「魚洗川B遺跡」長崎県文化財調査報告書第96集 長崎県教育委員会
- 副島和明・町田利幸編 1991 「疊石原遺跡」長崎県文化財調査報告書第100集 長崎県教育委員会
- 田川肇・副島和明・伴耕一朗編 1988 「百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」  
長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会
- 川川肇編 1994 「県道国見臺仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書第116集 長崎県教育委員会
- 辻田直人・竹中哲郎 2003 「長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査」『西海考古』第5号 西海考古同人会
- 寺山正剛編 1994 「筏遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第114集 長崎県教育委員会
- 長崎県教育委員会 1997 「原始・古代の長崎県」資料編II
- 長崎県土地対策室編 1977 「土地分類基本調査 烏原・荒尾」長崎県
- 古門雅高編 2001 「東巣野遺跡」有明町文化財調査報告書第13集 有明町教育委員会
- 松藤和人編 1994 「百花台東遺跡」同志社人文学部考古学調査報告第8冊 同志社人文学部文化学科
- 宮崎貴夫・伴耕一郎編 1990 「1肥賀太郎遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報XIII」長崎県文化財調査報告書第97集 長崎県教育委員会
- 和田政則編 2005 「長崎県埋蔵文化財調査年報12」長崎県文化財調査報告書第182集 長崎県教育委員会

## 第3章 調査

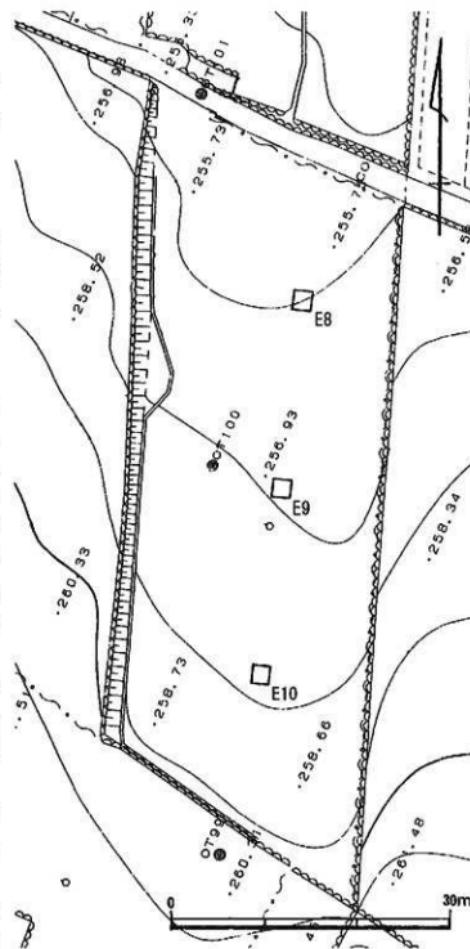
### 第1節 調査の方法

百花台公園拡幅工事予定地内に、19箇所の試掘場を地形に応じ任意に設定した。試掘場の呼称は、2003(平成15)年度の範囲確認調査で設定された公共座標による20m方眼(北から1・2・3・・・、西からA・B・C・・・と呼称)を利用してした。試掘場の内訳は $2 \times 2\text{ m}$ の試掘場を18箇所、 $2 \times 3\text{ m}$ を1箇所で、調査面積は78m<sup>2</sup>である。

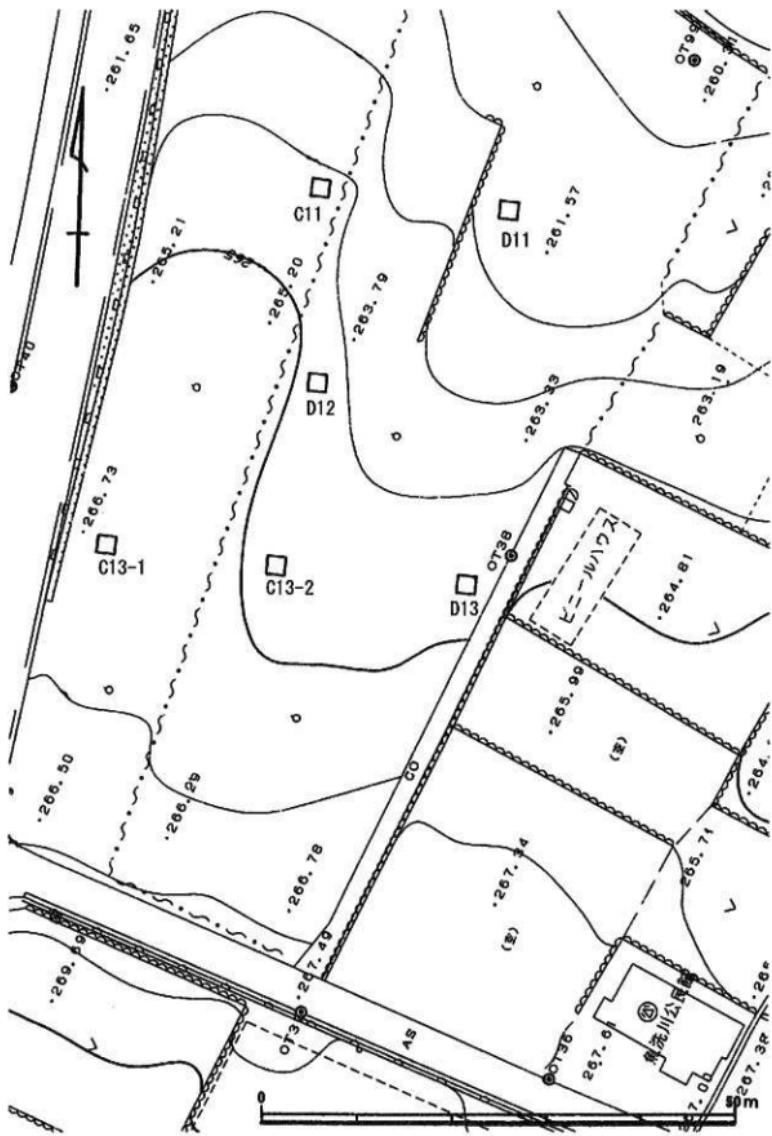
### 第2節 層位(第7・8図)

土層は試掘場によって差異が見られるが、概ね百花台遺跡群の基本層序と同様である。

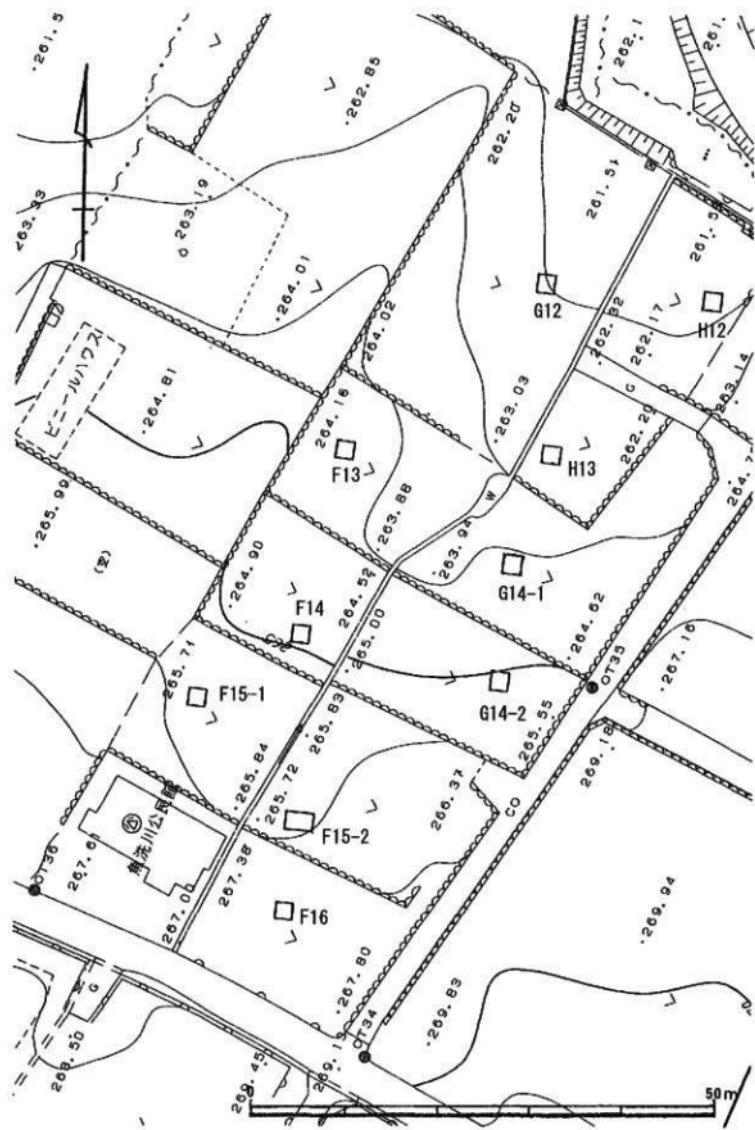
- 1層 黒褐色土層 耕作土である。
- 2層 黄褐色火山灰土層 繰まりがありない。一部に暗褐色土が混じり、まだらになる部分もある。縄文時代の遺物包含層である。百花台II層に相当。
- 3層 黒色火山灰土層 繰まりがなく、ぼそぼそしている。いわゆる第1黒色土帶で、百花台III層に相当。
- 4層 黒褐色土層 非常に締まっている。灰・橙・ピンク・白色などの2mm~1cm大のバミスを多く含む。いわゆるカシノミ層である。百花台IV層(礫石原火砕流堆積物)に相当。なお、E10区・F13区・F15区・G12区には灰黄色~灰白色の非常に締まった砂質土層があり、1986(昭和62)年度魚洗川B遺跡調査(副島・伴1989)の第IV b層(黄灰色砂質土層)に相当するものであろう。
- 5層 暗茶褐色土層 繰まっている。バミスをわずかに含む。6層と見分けが難しいが、6層よりやや明るい。百花台V層に相当か。



第4図 試掘場配置図① (s=1/500)



第5図 試掘場配置図② (s=1/500)



第6図 試験坑配置図③ (s=1/500)

6層 暗褐色土層 締まっている。白・橙・黄色などの1～5mmの大バミスを含む。クラックが著しい。この層の下層にATと思われる黄褐色土層が見られる。百花台VI層に相当。

7層 黒色火山灰土層 締まりがあまり無く、ぼそぼそしている。第2黑色土帶で、百花台VII層に相当。  
8層 明黄褐色土層 径2～3mの疊を含む。百花台VIII層に相当。

### 第3節 調査区の概要

谷部であるE8区・E9区は百花台遺跡群のII層（黄褐色火山灰土層）上面までに1.5m程の縄文時代の遺物包含層を含む上層堆積が見られた。特にE8区においては200点ほどの縄文土器片・黒曜石剥片が出土し、II層内に土壤1基を検出した。土壤の上面には炭が堆積しており、土壤の底には径30cmのピットを1箇所検出した。土壤の用途・性格等は不明である。

魚洗川公民館の北側（F13～H12区）では、F14区のII層で炭が集中する箇所があり、その上下からピット6箇所を確認した。またII層から縄文土器片を6点検出した。F15-1区ではVII層より黒曜石片が2点出土した。その他の試掘場は、すべてVIII層上面まで掘り下げたが遺構・遺物等はほとんど見られなかった。

県道沿いの調査区（C11～D13区）においては、C13-1区のII層より石斧状の石器1点を検出した。その他の試掘場は巨石の現れたD12区を除き、すべてVIII層上面まで掘り下げたが、遺構・遺物はほとんど検出されなかった。

19箇所の試掘場のうち、遺物を検出したのが9箇所（E8・E9・E10・C13-1・C13-2・D11・F14・F15-1・F16）、遺構を検出したのが2箇所（E8・F14）である。遺物はE8区が土器175点、石器類19点と集中しており、他の試掘場は土器片や黒曜石が2～3点出土したのみである。遺物の時期は、縄文後～晩期が主体である。

今回、旧石器時代の遺構・遺物はほとんど確認できなかったが、E8区周辺には縄文時代の遺物包含層が良好な状態で残存している状況が確認できた。また、F14区周辺には何らかの縄文時代の遺構が広がる可能性がある。

### 第4節 遺構

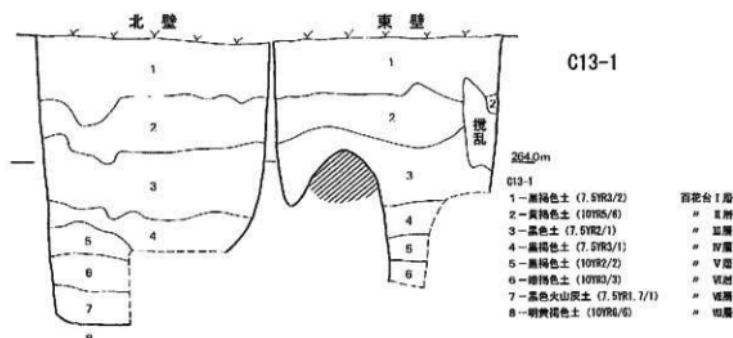
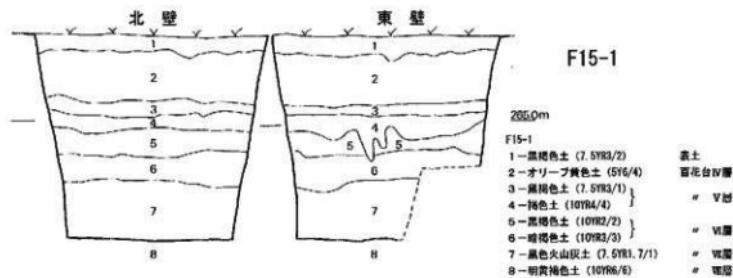
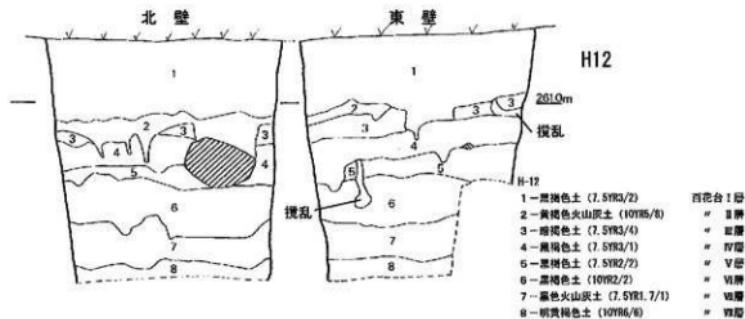
遺構はE8区から土壤1基、F14区からピット6箇所を検出した。

#### (1) 土壤(第8・9図)

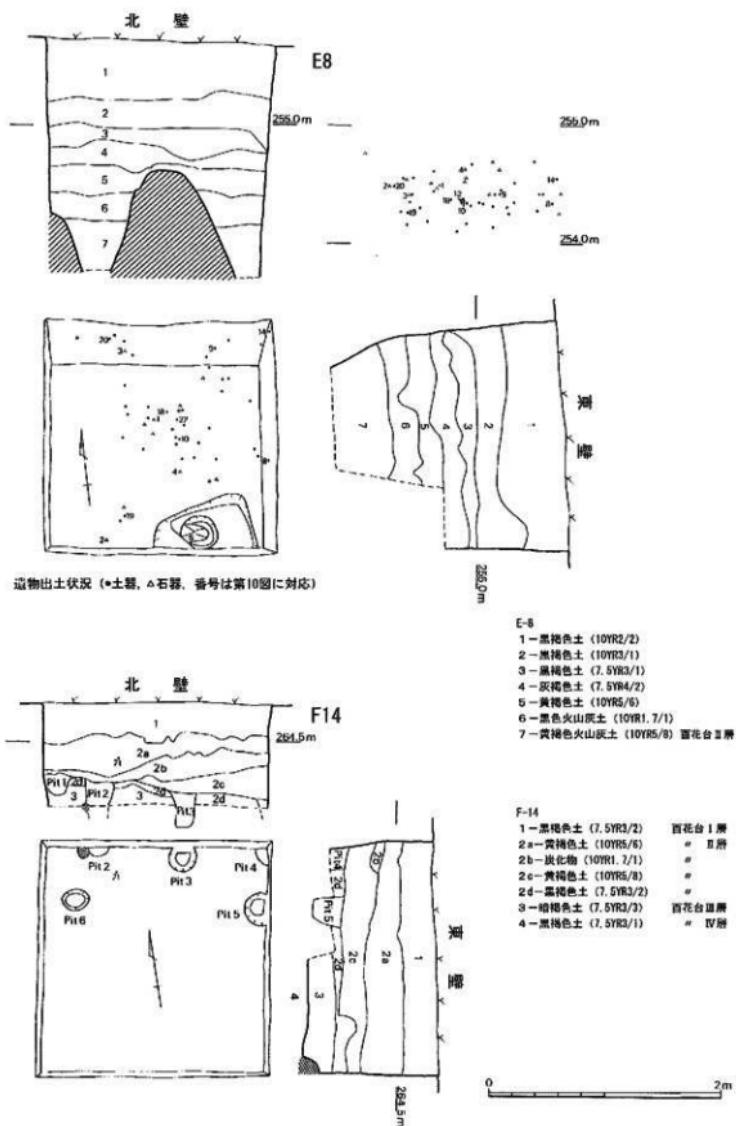
E8区の南東で検出した。土壤は5層上面から掘り込まれており、上面の検出レベルは標高254.7mである。土壤は一部が調査区外まで広がっているが、おそらく平面隅丸方形を呈するものと思われる。長軸は約85cm、復元短軸が約60cmである。上面に薄く炭化物の堆積が見られた。土壤の底には径約30cmのピットがありその中に自然石を検出した。土壤内の遺物は上器片が2点出土したが、細片であり時期等は不明であるが、周辺の遺物出土状況と検出レベルから縄文晩期の土壤であると思われる。

#### (2) ピット(第8図)

F14区の北半で6箇所検出した。規模は径約20cm前後である。ピット1～5は2d層上面からの掘り込みで、検出レベルは上面で標高264.2～264.0mである。ピット内覆土は2c層と類似した黄褐色土

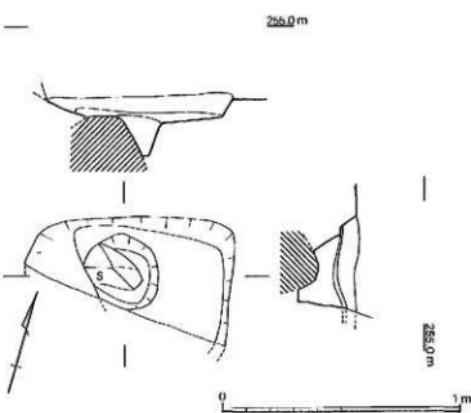


第7図 土層断面実測図 (s=1/40)



第8図 E 8区・F14区土層断面及び構造・遺物検出状況実測図 (s=1/40)

である。ピット内から遺物は出土していない。深さはピット1が約18cm、ピット3が約30cm、ピット5が約27cmである。ピット2・4は大部分が壁に入り込んでいたため完掘していない。なお、ピット1は北壁の土層観察により確認した。これらピットの上面には2b層の黒色炭化物層が堆積していた。ピット6はこの2b層からの掘り込みで、ピット群中、最も新しいものと判断される。調査範囲が狭いこともありピット群の性格は不明である。2a層から縄文晩期と思われる土器底部が出土しており、ピット群もこの時期に所属するものと考えられる。



第9図 E8区土壤実測図 (s=1/20)

## 第5節 遺物

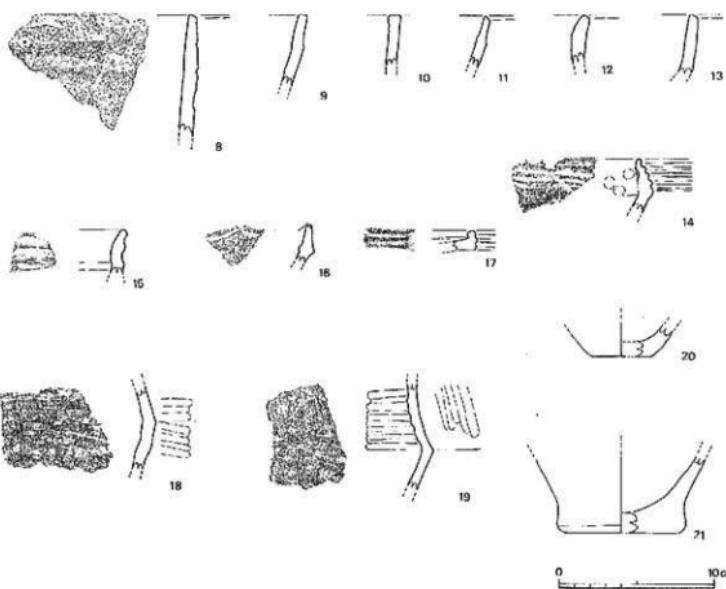
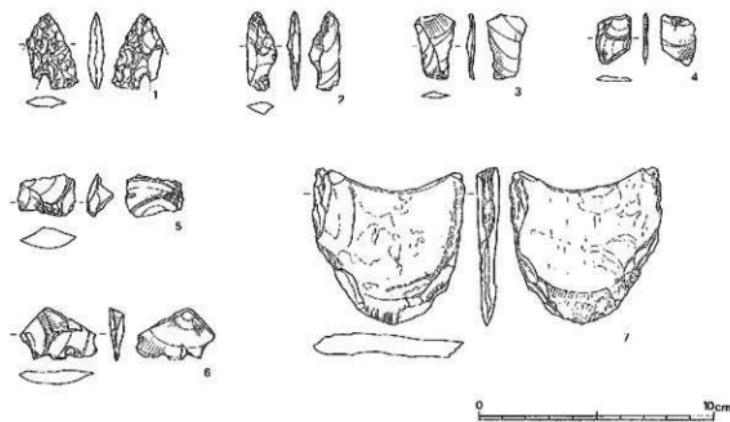
### (1) 石器 (第10図1~7)

石器類は総数で23点出土している。ここでは明確な加工痕の認められる7点を図化した。  
1は石鏨である。片方の脚部を欠損するが、正三角形に近い形状である。基部にU字状の抉りを持つ。全面に調整を施すが、わずかに自然面を残す。青黒色を呈する黒曜石製で、長さ32.0mm、現存幅22.0mm、厚さ6.5mm、重さ3.3gを測る。E8区5層出土。2~4は黒色黒曜石製剝片である。2は上部縁、右側縁上半、背面左上半に細かな剥離が認められる。E8区5層出土。3は両側縁にわずかな剥離が認められる。上下は切断されている。E8区5層出土。4は右側縁に微調整が認められる。上部は切断されている。E8区4層出土。5・6は加工痕のある黒色黒曜石製剝片である。5は表面下部に細かな剥離痕が認められる。また、背面右側にもわずかに剥離が認められる。上部縁には自然面が残る。F15-1区5層(百花台V層)出土。6は表面下縁の右寄りに刃こぼれ状の剥離痕が認められる。上部縁には自然面が残る。F15-1区5層(百花台VI層)出土。7は扁平な磨製石斧状石器である。刃部は両面より研磨しており、一部側縁部まで達している。基部は大きく済入している。石材は蛇紋岩製である。長さ66.0mm、幅64.0mm、厚さ10.0mm、重さ53.8gを測る。石斧として使用したとすれば石材から見て脆弱な印象を受ける。磨製石斧を再利用し他の用途に使用したものか。C13-1区2層(百花台II層)出土。

### (2) 上器 (第10図8~21)

土器は総数で189点出土している。ここでは、口縁部10点、胴部2点、底部2点を図化した。他はほとんどが小破片の胴部片である。

8~13は深鉢の口縁部である。8は内面の丁寧なナデ仕上げに対し、外面の調整は粗く粘土帯の隆起がそのまま残る。また、外面にカーボンの付着が顕著である。外面は黒褐色、内面はにぶい赤褐色



第10図 遺物実測図 (s=1/2・1/3)

で、胎土に石英・角閃石・白色砂粒を含む。E 8区6層（疊石原II層か）出土。9～13は小破片のため傾きが不明なものも含まれるが、口縁部外面に文様を持たないものである。9は外面にややカーボンの付着が認められる。外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄橙色で、胎土に金雲母・白色・黒色砂粒を含む。E 8区4層出土。10は口縁端部が内面にやや肥厚する。外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色で、胎土に石英・角閃石・金雲母・白色砂粒を含む。E 8区6層出土。11は口縁端部を薄くつくり出している。浅鉢である可能性も否定できない。内外面ともにぶい橙色で、胎土に石英・金雲母・赤色砂粒を含む。E 8区5層出土。12はやや外に開き口縁端部が丸みを帯びる。外面は明赤褐色、内面は赤褐色、胎土に石英・角閃石・白色・黒色砂粒を含む。E 8区6層出土。13は内外面とも丁寧なナガ仕上げであるが、外面はカーボンの付着が全面に認められる。外面は黒褐色、内面は明赤褐色、胎土に石英・金雲母・白色・黒色砂粒を含む。F 14区2層（百花台II層）出土。14は口縁帶に4条の沈線を施す。内面に指押え状の円形のくぼみが認められる。深鉢であろうか。外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色で、胎土に石英・角閃石・白色砂粒を含む。E 8区4層出土。15は口縁帶にU字状の凹線を3条施す。内外面とも丁寧な磨きが施されている。頸部以下が残っていないため、深鉢か浅鉢かの判断は難しい。内外面とも明赤褐色で、胎土に石英・角閃石・白色砂粒を含む。E 8区6層出土。16・17は浅鉢の口縁部である。16はM字状の山形突起部分である。口縁端部直下に1条の沈線を施す。頸部への移行部に横円と思われる凹点が施されている。内外面とも灰黄褐色で、胎土に角閃石・白色砂粒を含む。E 8区5層出土。17は口縁端部内面に1条、口縁外側に2条の沈線を施す。外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色、胎土に角閃石・石英・白色砂粒を含む。E 8区4層出土。18・19は胴部片である。18は届山部が内外面とも緩やかで、明確な稜はない。外面の届山部より上部は横方向、下部は右下がりのヘラ磨きを施す。外面はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色、胎土に石英・角閃石・白色砂粒を含む。19は内面の届山は緩やかだが、外面は明確な稜がつき、届山部から上はやや外に開く。外面上部は縦方向の、内面上部は横方向のヘラ磨きを施す。外面にカーボンの付着が認められる。外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色、胎土に石英・角閃石・金雲母・白色砂粒を含む。18・19とともにE 8区6層出土である。20・21は底部である。20は丸底に近いが、平坦あるいはやや上げ底気味となるものであろうか。内外面ともに橙色、胎土に石英・角閃石・白色砂粒を含む。E 8区4層出土。21は平底で、底部端は外にあまり張り出さない。F 14区2層出土。外面は明赤褐色、内面はにぶい褐色、胎土に石英・角閃石・白色砂粒・黒色砂粒を含む。以上、今回の調査で出土した土器を見てきたが、8の上器が出土したすべての上器片の中で最大のものである。したがって、時期や型式の特定は困難を伴うが、ほぼ縄文後期後半～晩期前半の範囲に収まるであろう。

#### 【参考文献】

- 清川純一 1998 「縄文後・晩期上器考」『肥後考古』第11号 肥後考古学会  
隈昭志編 1980 『古保山・古闘・大城』熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会  
水ノ江和同 1997 「北部九州の縄文後・晩期十器」『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会  
古門雅高編 1995 『国崎遺跡II』南串山町文化財調査報告書第3集 南串山町教育委員会  
古門雅高 2001 「第VI章 長崎県の縄文晩期から弥生時代前期の土器の様相」『県内主要遺跡内容確認調査報告書IV』  
長崎県文化財調査報告書第159集 長崎県教育委員会

## 第4章 総括

今回の調査において、検出した遺構は縄文時代晚期の土壙1基（E 8区）、縄文時代晚期のピット6箇所（F 14区）、出土した遺物は旧石器時代の黒曜石剥片2点（F 15-1区）、縄文早期の石鏃1点（E 8区）、縄文時代後～晚期の土器片189点、石器類20点（主にE 8区）である。

### (1) 旧石器時代について

旧石器時代の遺物が2点と少ないのは、2003（平成15）年度の調査結果とも符合する。調査域がほぼ20m間隔であるので、旧石器時代の小規模なブロックを検出できなかった可能性もあるが、2カ年合わせて50箇所の試掘域からの出土量にしてはあまりにも寡少である。従来からの指摘どおり、この時期には土黒川東岸沿いに選択的に占拠していたのだろう。しかし、1988（昭和63）年の全国植樹祭関係の発掘調査において、ナイフ形石器を主体とする石器群が遺跡の東側で確認されている（註1）。今回の調査区はその間にあたり、現段階では空白地帯であったと判断せざるを得ないであろう。

### (2) 縄文時代について

E 8区周辺には縄文後期～晚期の遺物包含層及び遺構が残存していた。これまで縄文期の包含層である百花台II層は、魚洗川B遺跡付近では削平され、確認されることは希であったが、今回良好な状態で残存していることが判明した。E 8区周辺は谷部であるが故に、削平されることなく、縄文時代の包含層がよく残っていたと考えられる。ただし、2005（平成17）年の調査において、この包含層は北側へ広がることはないことも確認している。

魚洗川公民館の北側も、谷地形を呈しており百花台II層の残存している区域である。ただし、7箇所（F 14・F 15-2・F 16・G 12・G 14-1・H 12・H 13）のII層が見られた試掘域のうち、縄文時代晚期の遺物包含層及び遺構が検出されたのはF 14区のみであった。したがって、この周辺に縄文期の包含層が広がる可能性は低いものと思われる。

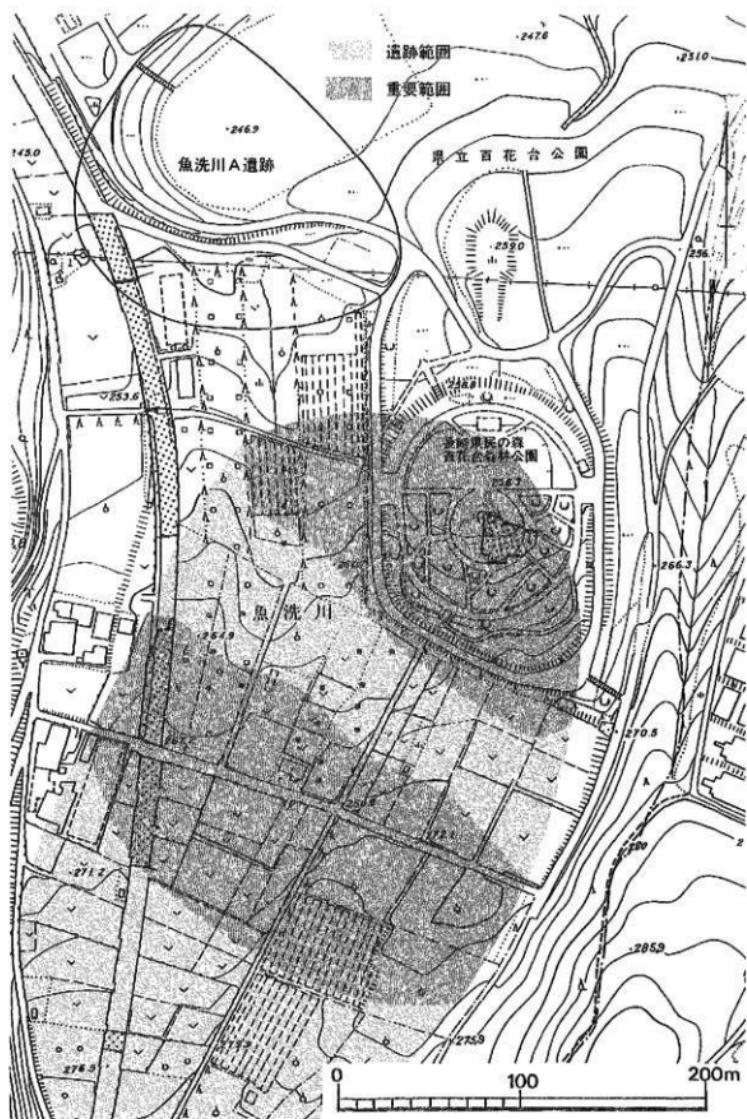
### (3) 魚洗川B遺跡の範囲及び今後の課題について

最後に、魚洗川B遺跡の範囲についてであるが、南側は未調査の部分が多いため明確ではないが、今回の調査と過去の調査結果を総合すれば、植樹祭の行われた「長崎県民の森百花台森林公園」周辺及び魚洗川公民館周辺から県道にかけての二つのエリアが遺跡の重要範囲であると想定することが可能であろう。

百花台遺跡群は、旧石器時代研究の良好な資料を提供する遺跡として重要視されている。魚洗川B遺跡も後期旧石器時代のナイフ形石器等の石器群の検出などが注目されるところである。今後、この石器群の分布範囲を確認していく必要があろう。更に、今回の調査で検出された、縄文期の文化層についても今後十分に留意していかなければならないであろう。

今回の調査及び報告書作成にあたり、多くの方々に多大なる御協力及びお力添えをいただきました。最後になりましたが、ここに感謝申し上げます。

【註】（註1）2004（平成16）年度までの魚洗川B遺跡の範囲確認調査においては本調査地Xがあったため、2005（平成17）年にも継続して調査を実施したが、その際にも植樹祭会場の南側の調査区からも台形様石器の右核が第VI層から出土している。



第11図 魚洗川B遺跡範囲 ( $s=1/2,500$ )

# 図 版

図版 1



魚洗川B遺跡遠景（北から）



魚洗川B遺跡近景（南から）



調査風景

図版 2



H12 北壁



F 15-1 北壁



C13-1 東壁



E8 東壁



E8 土壤検出状況



E8 遺物出土状況

図版 4



F14 北壁及びピット検出状況

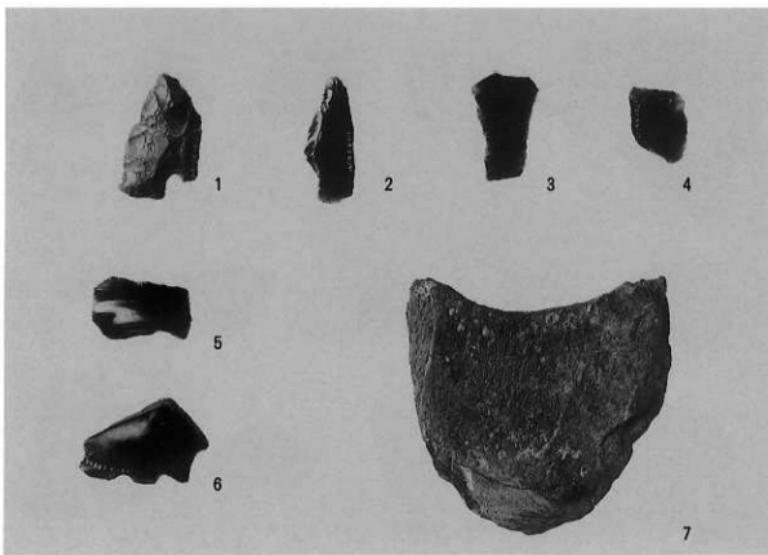
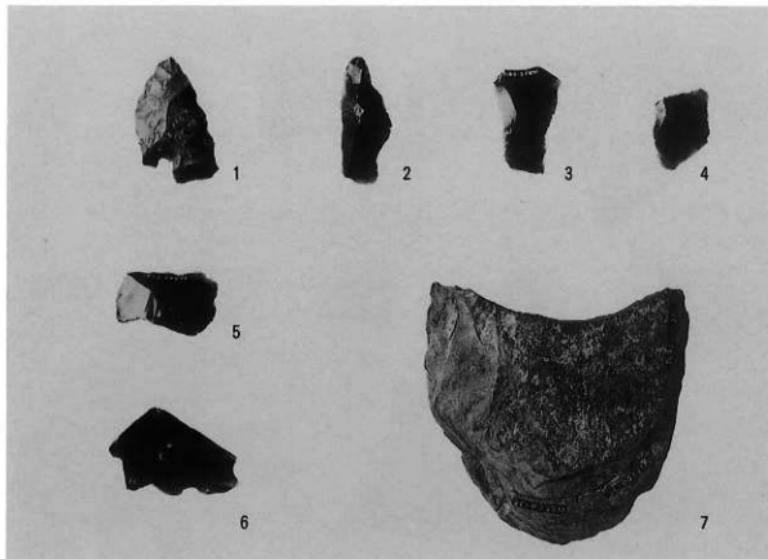


F14 炭検出状況

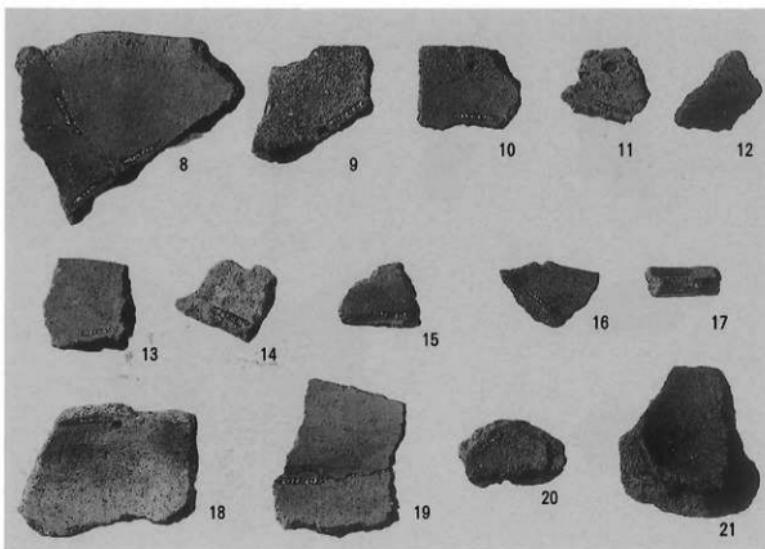
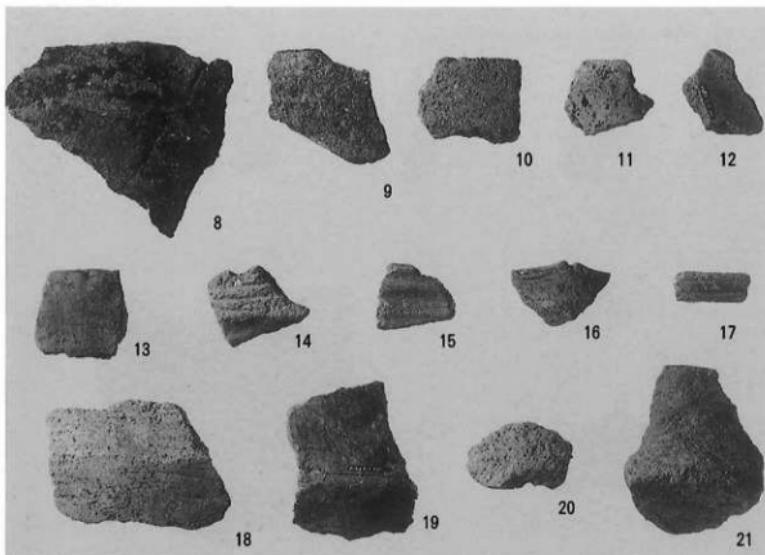


F14 遺物出土状況

図版 5



図版 6



## 報告書抄録

ふりがな	ちいきょよんいせきないようかくにんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ							
副書名								
巻次	III							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第188集							
編著者名	山下英明・本田秀樹・平田賢明							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-0861 長崎県長崎市江戸町2-13			TEL 095-824-1111				
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	○ ○ ○	○ ○ ○			
浜郷遺跡	長崎県南松浦郡新上五島町有川郷	6 8	1 1	32° 58' 49"	129° 07' 21"	20040621 ~ 20040702	76.5	学術調査
魚洗川B遺跡	長崎県雲仙市国見町	3 2	4 4	32° 48' 44"	130° 17' 43"	20041025 ~ 20041112	78	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
浜郷遺跡	墳墓	弥生	壺棺・不明 円形遺構 ピット	人骨・弥生土器・ 土師器・石鍋・ アワビ・イノシシの下顎骨		弥生時代の埋葬 遺構を検出		
魚洗川B遺跡	遺物包含地	旧石器 縄文	ピット 土壤	石器 縄文土器・石器		縄文時代の上塙・ ピットを検出		
浜郷遺跡 (要約)	浜郷遺跡は五島列島北部・有川町の海浜部に堆積した砂丘の標高5~7m付近に立地する。昭和32(1957)年の地下貯水槽建設工事の際に人骨が出土し、昭和42(1967)年と昭和44(1969)年には大学の合同調査が実施されている。今回、これまでの調査区の隣接地で住宅の解体があり、追加調査が可能となったため、確認調査を実施した。その結果、地表下2mほど(標高5m付近)の砂層から、アワビやイノシシ下顎骨を伴った人骨や壺棺の埋葬遺構を確認した。遺構はこれまでの調査で見つかっている資料内容とも共通し、弥生時代中期初頭~前半頃に比定される。今回の調査成果から、浜郷遺跡で弥生時代の遺構・遺物が出土するレベルは現地表より2m以上の深部にあり、遺存状態も良好なことが判明し、遺跡破壊の緊急性は薄らいだ。							
魚洗川B遺跡 (要約)	魚洗川B遺跡は、島原半島北部の雲仙市国見町に所在し、標高200~280mを測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に立地している。これまでの調査によって、縄文時代の遺物包含層のほか、後期旧石器時代の、ナイフ形石器を主とする石器群が検出されている。今回、百花台公園拡張計画に備えるため、範囲確認調査を実施した。調査の結果、旧石器時代の石器や、縄文時代後~晩期の遺構や上器・石器が出土し、縄文時代の遺物包含層が部分的にではあるが、残存していることが判明した。							

長崎県文化財調査報告書 第188集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ

平成18年3月31日

発 行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印 刷 昭英印刷有限会社

長崎市平野町13-13